

茨城県行方市
岩ノ入遺跡
発掘調査報告書

2008年10月

行 方 市 市 教 育 跡 委 調 員 査 会 会

序

行方市は、茨城県の東南部に位置し、平成17年9月2日に麻生町・北浦町・玉造町の3町が合併して誕生しました。人口約4万人、面積は、166.33km²になります。東は北浦、西は霞ヶ浦(西浦)の大きな湖に面しています。地形的には東西の湖岸部分は低地、内陸部は標高30m前後の丘陵台地「行方台地」で形成されており低地は水田、台地は畑地として利用されています。霞ヶ浦沿岸部は概ねなだらかなで連続的な稜線が見られるのに対し北浦側は屈曲、出入りが見られ比較的起伏に富んでいます。温暖な気候と豊かな自然環境に恵まれ、古くより人々の生活の痕跡としての貝塚や古墳・城跡などの遺跡が数多く点在しております。

この度、行方市麻生字岩ノ入地内の土採取事業計画に伴い埋蔵文化財の確認調査を行ったところ、計画地内に古墳時代～平安時代の遺構が確認されました。開発事業者と取扱いについての協議を行なった結果、遺跡の現状保存が困難であることから、やむを得ず発掘調査を行い記録保存を図ることになりました。

本書は、その岩ノ入遺跡の調査成果を収録したものです。学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深めるために活用されることにより、教育・文化の向上の一助となれば幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行までご協力、ご指導を賜った関係者並びに関係機関に対し深く感謝申し上げます。

平成20年10月

行方市教育委員会 教育長

行方市遺跡調査会会长

額賀 旭

例　　言

- 1 本報告書は、茨城県行方市麻生字岩ノ入2772-2に所在する岩ノ入遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、株式会社YASU（代表取締役 茂木康明）が計画した土採取事業に伴う記録保存の発掘調査で、対象面積は1100m²である。
- 3 調査は行方市遺跡調査会が茨城県教育庁文化課、行方市教育委員会の指導のもとに実施した。
- 4 調査は平成20年3月27日～6月26日までの期間、合わせて50日間実施した。
- 5 整理作業は平成20年6月16日～9月30日まで行った。
- 6 行方市遺跡調査会組織は下記のとおりである。

会　長	額賀　旭	(行方市教育委員会教育長)
副会長	風間　亨夫	(行方市文化財保護審議会会長)
理事	茂木　岩夫	(行方市文化財保護審議会副会長)
"	植田　敏雄	(行方市文化財保護審議会委員)
"	羽生　均	(　"　)
"	宮内　俊雄	(　"　)
"	山中　康雄	(　"　)
"	宮内　利夫	(　"　)
"	河野　勝雄	(　"　)
"	伊勢山雅昭	(　"　)
"	宮崎　幸男	(　"　)
"	大塙　浩一	(　"　)
"	飯田　俊彦	(　"　)
"	海老澤幸雄	(　"　)
"	茂木　康明	(株式会社YASU)
監　事	高橋　量光	(行方市文化財保護審議会委員)
"	高野　顕	(　"　)
事務局長	宮本　正	(生涯学習課課長)
事務局員	内田　博明	(生涯学習課課長補佐)
"	荒張　文枝	(　"　文化振興G係長)
"	平塚　喜昭	(　"　文化振興G係長)
"	塙　大	(　"　文化振興G主任)
調査担当者	汀　安衛	(鹿行文化研究所)
調査員	徳利　初代	(　"　)

- 7 本報告書の執筆は汀 安衛が行った。
- 8 出土遺物、図面、写真類は行方市教育委員会が保管する。

凡　　例

- 1 本報告書の図面の縮尺は原則1/60、遺物は原則1/3とし水系レベルは標高を表示した。
基準点の座標はX-102.250 Y59739.085
- 2 遺構は原則1/20、1/60、遺物は1/3を基準とし、法量はA口径 B器高 C底径とし、その他はその都度表記した。スクリントンは次のように使用した。■■竈 ■■焼土 ■■火床部
- 3 整理作業は主に遺物水洗い、注記、復元と図版作成を徳利初代、トレースと一部の遺物実測を大野和子、遺物台帳、復元、図版作成と報文執筆は汀 安衛が行った。
- 4 記号は竪穴住居跡はS I、土坑はS K、ピットはPを使用した。
- 5 調査にあたり次の方々にご協力を受け記して感謝の意を表します。茨城県教育庁文化課、行方市教育委員会、鹿行教育事務所、塙 弘・塙 芳子・塙 二郎・高須脩夫・海老沢光雄・金子光男・柳川裕志・大野和子、行方市シルバー人材センター・斎藤弘道氏

抄 錄

	イワノイリイセキハックツチョウサホウコクショ
書 名	岩ノ入遺跡発掘調査報告書
発 行 者	行方市教育委員会、行方市遺跡調査会
所 在 地	行方市山田2564-10
編 集 者	汀 安衛
編 集 機 関	鹿行文化研究所
所 在 地	茨城県鹿嶋市青塚718-1
発行年月日	平成20年10月30日
所収遺跡名	岩ノ入遺跡
所 在 地	茨城県行方市麻生字岩ノ入2772-2他
市町村番号	421
遺 跡 番 号	302
	北緯36°0'02" 東経140°29'33"
調 査 期 間	2008年3月26日~2008年6月26日
調 査 面 積	1100m ²
調 査 原 因	土採取事業に伴う記録保存
所収遺跡名	岩ノ入遺跡
時 代	古墳時代・奈良時代・平安時代
主 な 遺 構	住居跡・土坑・溝・ピット・炭窯
主 な 遺 物	土師器・須恵器・繩文土器

目 次

I 遺跡の位置と史的環境	1
II 調査に至る経緯	2
1 確認調査と調査日誌	2
III 調査の概要	3
1 住居跡と出土遺物	5
1号住居跡と出土遺物	5
2号住居跡と出土遺物	6
3号住居跡と出土遺物	8
4号住居跡と出土遺物	9
5号住居跡と出土遺物	10
6号住居跡と出土遺物	12
7号住居跡と出土遺物	13
8号住居跡と出土遺物	16
9号住居跡と出土遺物	18
10号住居跡と出土遺物	19
11号住居跡と出土遺物	20
12号住居跡と出土遺物	21
13号住居跡と出土遺物	22
14号住居跡と出土遺物	23
15号住居跡と出土遺物	25
16号住居跡と出土遺物	26
17号住居跡と出土遺物	28
18号住居跡と出土遺物	30
19号住居跡と出土遺物	31
20号住居跡と出土遺物	33
21号住居跡と出土遺物	35
22号住居跡と出土遺物	35
23号住居跡と出土遺物	37
24号住居跡と出土遺物	39
2 土坑	41
1号土坑と出土遺物	41
2号土坑と出土遺物	41
3号土坑と出土遺物	41
4号土坑と出土遺物	42
5号土坑と出土遺物	42
6号土坑と出土遺物	42
7号土坑と出土遺物	42
8号土坑と出土遺物	42
9号土坑と出土遺物	44
10号土坑と出土遺物	44
11号土坑と出土遺物	46

3 ピット	46
1・2・3・4・7・8・9・10・11・12・13・14・16・17・18・19・20・21・22・ 23・24・25・26・27号ピットと出土遺物	46
4 溝	50
1号溝と出土遺物	50
2号溝と出土遺物	51
5 炭窯	52
IV 結びにかえて	53
住居跡の変遷と出土遺物	53

挿図目次

第 1 図 遺跡の位置と周辺遺跡	1
第 2 図 遺構位置図	3
第 3 図 1号住居跡・出土遺物実測図	5
第 4 図 2号住居跡・出土遺物実測図	7
第 5 図 3号住居跡・出土遺物実測図	8
第 6 図 4号住居跡実測図	9
第 7 図 5号住居跡・出土遺物実測図	11
第 8 図 6号住居跡・出土遺物実測図	12
第 9 図 7号住居跡・出土遺物実測図	14
第 10 図 7号住居跡出土遺物実測図	15
第 11 図 8号住居跡実測図	17
第 12 図 9号住居跡・出土遺物実測図	18
第 13 図 10号住居跡・出土遺物実測図	19
第 14 図 11号住居跡実測図	20
第 15 図 12号住居跡・出土遺物実測図	21
第 16 図 13号住居跡・出土遺物実測図	22
第 17 図 14号住居跡・出土遺物実測図	23
第 18 図 15号住居跡・出土遺物実測図	25
第 19 国 16号住居跡・出土遺物実測図	27
第 20 国 17号住居跡実測図	29
第 21 国 17号住居跡出土遺物実測図	29
第 22 国 18号住居跡・出土遺物実測図	30
第 23 国 19号住居跡実測図	31
第 24 国 19号住居跡出土遺物実測図	32
第 25 国 20号住居跡・出土遺物実測図	34
第 26 国 21号住居跡実測図	35
第 27 国 22号住居跡・出土遺物実測図	36
第 28 国 23号住居跡・出土遺物実測図	38
第 29 国 24号住居跡・出土遺物実測図	40
第 30 国 1. 2. 3. 4. 5. 6. 11号土坑・7. 8. 9. 10. 11. 12. 13. 14号ピット実測図	43
第 31 国 7. 9. 10号土坑実測図・7号土坑出土遺物実測図	45
第 32 国 1. 2. 3. 4. 16. 17. 18. 19. 20. 21. 22. 23. 24. 25. 26号ピット実測図	46
第 33 国 3号ピット・1. 2号溝実測図	51
第 34 国 1号炭窯実測図	52
第 35 国 住居跡変遷図	54

図 表 目 次

第 1 表	1号住居跡出土遺物観察表	6
第 2 表	2号住居跡出土遺物観察表	8
第 3 表	3号住居跡出土遺物観察表	9
第 4 表	5号住居跡出土遺物観察表	10
第 5 表	6号住居跡出土遺物観察表	13
第 6 表	7号住居跡出土遺物観察表	16
第 7 表	9号住居跡出土遺物観察表	18
第 8 表	10号住居跡出土遺物観察表	20
第 9 表	12号住居跡出土遺物観察表	21
第 10 表	13号住居跡出土遺物観察表	22
第 11 表	14号住居跡出土遺物観察表	24
第 12 表	15号住居跡出土遺物観察表	25
第 13 表	16号住居跡出土遺物観察表	28
第 14 表	17号住居跡出土遺物観察表	30
第 15 表	18号住居跡出土遺物観察表	31
第 16 表	19号住居跡出土遺物観察表	33
第 17 表	20号住居跡出土遺物観察表	34
第 18 表	22号住居跡出土遺物観察表	37
第 19 表	23号住居跡出土遺物観察表	39
第 20 表	24号住居跡出土遺物観察表	41
第 21 表	7号土坑出土遺物観察表	44

図 版 目 次

P L 1	調査区全景 右上西側調査区	57
P L 2	1号住居跡竪・1号住居跡完掘・2号住居跡竪・2号住居跡完掘・3号住居跡完掘・1・2・3号住居跡完掘・4号住居跡出土遺物・5号住居跡出土遺物	58
P L 3	5号住居跡竪・5・6・7号住居跡完掘・6号住居跡竪・6号住居跡完掘・7号住居跡竪・7号住居跡完掘・8号住居跡竪・8号住居跡完掘	59
P L 4	9号住居跡出土遺物・9号住居跡完掘・10号住居跡完掘・11号住居跡完掘・12号住居跡完掘・13号住居跡竪・6・14・7・9号住居跡完掘	60
P L 5	13・15号住居跡出土遺物・14号住居跡竪・15号住居跡完掘・16号住居跡出土遺物・16号住居跡完掘・17号住居跡出土遺物・17号住居跡完掘・18号住居跡完掘	61
P L 6	19号住居跡出土遺物・20号住居跡竪藏穴・18・19・20・21号住居跡・22号住居跡完掘・23・24・19号住居跡完掘・23号住居跡竪・23号住居跡完掘・24・19号住居跡完掘	62
P L 7	1号土坑完掘・7号土坑出土遺物・10号土坑土層、10号土坑完掘・2号溝完掘・ピット群・炭窯土層 同完掘	63
P L 8	S I 1・S I 2・S I 3・S I 5・S I 6・S I 7・S I 12・S I 13・S I 14出土遺物	64
P L 9	S I 15・S I 16・S I 17・S I 18・S I 19・S I 20・S I 22・S I 23・S I 24・S K 7・炭窯出土遺物	65

I 遺跡の位置と史的環境 (第1図)

本遺跡は、茨城県行方市麻生字岩ノ入2772-2番地に所在する。遺跡の所在する行方市は茨城県の東南部に位置し、東側を北浦、西側を霞ヶ浦(西浦)に面し、台地中央部に源を発する中小河川によって樹枝状に支谷が解析され凹凸、屈曲の多い地形を呈している。

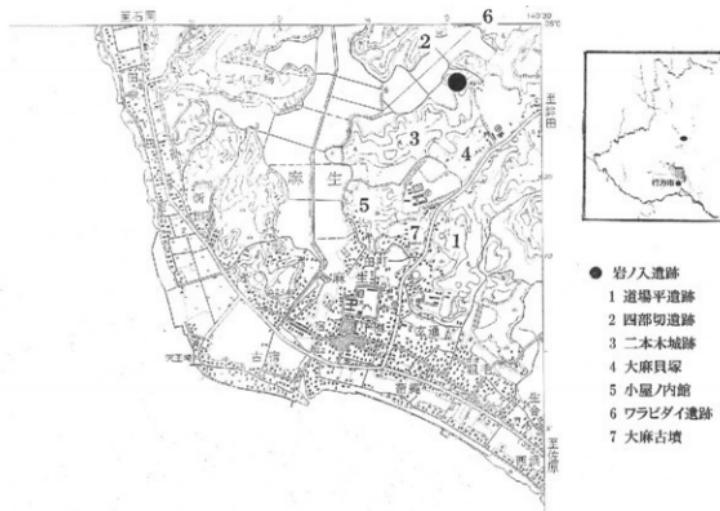
遺跡の大半は、これらの支谷線または半島状、北浦、西浦に面する舌状台地上や沖積平野などに縄文時代から近世にかけて多くの遺跡が存在している。霞ヶ浦や北浦に面する湖岸沖積地は古来より水田として利用され、こうした恵まれた自然環境の中に縄文時代から近世まで多くの遺跡が残されており、当時の人々の暮らしを知る事が出来る。

今回調査対象になった岩ノ入遺跡は、霞ヶ浦(西浦)に流れ込む城下川左岸の馬の背状台地先端部の標高34m程の台地に占地し、周辺には、縄文時代から古墳時代にかけて多くの遺跡が存在している。南側300mの半島状台地基部には大麻貝塚(縄文時代中期、後期と古墳時代)西側には小屋ノ内館、二本木城跡、南側には小支谷を挟んで道場平貝塚と遺跡、東側にもワラビ台遺跡、北西側に谷を挟んで四部切貝塚(縄文後期、古墳時代)がある。(注1)

城下川下流部には中世行方四頭の1人麻生氏の居城「麻生城跡」や南側の沖積地には(現麻生小学校)江戸時代の麻生藩陣屋跡など古代から近世まで多くの遺跡が存在し恵まれた自然環境を物語る。

岩ノ入遺跡は今回の試掘調査によって確認された遺跡のため、現在まで調査や報文、資料は無い。

注 1 麻生町の遺跡	1997年	麻生町教育委員会 編集 茨城大学人文学部考古学教室
2 道場平遺跡発掘調査報告書	1996年	麻生町遺跡調査会
3 四部切遺跡発掘調査報告書	1990年	麻生町遺跡調査会
4 二本木城跡発掘調査報告書	1991年	麻生町遺跡調査会
5 大麻貝塚発掘調査報告書	1990年	麻生町遺跡調査会
6 小屋ノ内館発掘調査報告書	1970年	麻生町遺跡調査会
7 ワラビダイ遺跡発掘調査報告書	1996年	麻生町遺跡調査会
8 大麻古墳発掘調査報告書	1999年	麻生町遺跡調査会



第1図 遺跡の位置と周辺遺跡

II 調査に至る経緯

平成19年11月、株式会社YASU（代表取締役茂木康明）より 市内麻生字岩ノ入2772-2外3筆について土採取事業の計画に対する埋蔵文化財の所在の有無と取扱いについて照会があつた。行方市教育委員会で確認調査の試掘を行ったところ遺構と遺物が確認されたため調査結果を報告し株式会社YASUと協議を行なった。

その結果計画変更による現状保存は困難との結論となり、開発業者である株式会社YASUが調査費用を負担し、発掘調査を行い記録保存することとなつた。

行方市遺跡調査会が平成20年3月25日より5月9日の予定で調査を開始した。調査対象面積約1000m²であったが、茨城県教育庁文化課の指導により面積は1100m²に拡大、調査は6月26日までの50日間となつた。

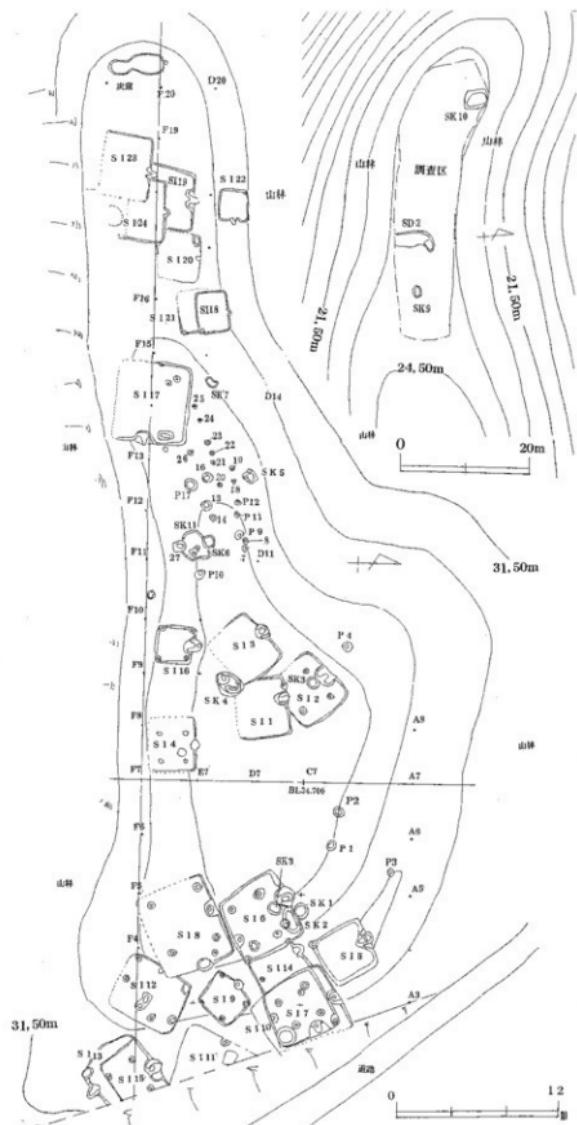
1 確認調査と調査日誌

調査は平成19年12月17日にトレント2本を設定し試掘調査を行なつた。その結果奈良時代～平安時代の住居跡3軒とピット1基が認められた。以下、調査経過を抜粋し箇条書に述べる。

- 3月25日 確認調査トレントに従つて重機により表土除去。諸道具搬入。
- 3月26日 本日より遺構確認作業を開始。プレハブ搬入、表土除去。
- 3月27日 雜木の根株除去と遺構確認作業。
- 4月 1日 グリット設定、遺構確認作業。複合関係が見られる。立木根株除去が大変。
- 4月 2日 中央部の遺構から1号住居跡として調査開始。
- 4月 7日 5・6号住居跡調査、1・2号住居跡竪調査。
- 4月11日 降雨の為午後より調査。2号住居跡平面図作成、5号住居跡竪調査。6号住居跡調査。
- 4月14日 7号住居跡調査、6号住居跡土層作図、3号住居跡竪調査。雨多く作業進まず半日。
- 4月16日 6号住居跡遺物上げ、4・7号住居跡土層作図。各遺構浅いが立木根株が多い。
- 4月21日 5・6号住居跡竪調査。8・9・11・14号住居跡調査。
- 4月28日 13・14号住居跡土層作図。9号住居跡平面図作成。
- 5月 1日 13号住居跡遺物上げ。6・11号住居跡柱穴調査。
- 5月 7日 14・16号住居跡土層作図。16は深い。調査区東側大半目途が付く。
- 5月 9日 14号住居跡竪調査。16号住居跡土層作図。17号住居跡調査開始。
- 5月12日 14・16・17号住居跡竪、平面図、調査。県文化課指導により西側部分表土除去し住居跡確認。
- 5月17日 14・15号住居跡平面図作成。17・18号住居跡調査。炭窯の調査終る。
- 5月21日 17号住居跡遺物平面図作成。18・19号住居跡土層ベルト除去。ピット調査。
- 5月23日 19号住居跡土層作図。ピット調査。
- 5月26日 18・19号住居跡竪調査。20号住居跡平面図作成。貯蔵穴調査。
- 5月28日 22号住居跡竪調査。16号住居跡柱穴調査。19号住居跡南側表土除去。
- 文化課後藤氏視察。エリア外西側の調査を要請される。
- 6月 1日 16・22・23号住居跡柱穴、壁溝、竪確認調査。
- 6月 5日 県文化課指導の西側エリア調査。土坑、溝有り。全員での作業終了。
- 6月 6日 西側エリア測量。写真。22号住居跡遺物平面図作成。19号住居跡竪調査。
- 6月10日 11・12・13・14号住居跡掃除と確認調査、写真撮影。
- 6月14日 17号住居跡南側確認。壁溝、柱穴、貯蔵穴調査。
- 6月16日 23号住居跡調査。
- 6月26日 24号住居跡調査。本日で現場作業終了。

III 調査の概要（第2図）

調査区は、城下川から分かれた支谷に面する馬背台地で、標高34.7mを測る。中央部がさも高



第2図 遺構位置図

く弱く反「く」の字状に屈曲、中央部から東西南北にそれぞれ比高差1.5m程の弱い傾斜を示す。面積と地形は東西80m南北10~20mと西側の標高25mの10m程低い地区に分れ、この部分は幅5~10m、長さ20mの馬の背状部分である。

確認調査によって4軒前後の住居跡が推定されており、本調査もこのトレンチに拠って表土を除去し、遺構確認に務めたところ15軒前後の住居跡が認められた。その後、更に西側周辺の表土を除去し確認調査を行った結果住居跡24軒、土坑11基、ピット15、溝2条、炭窯1基が認められた。西側では確認面が灰褐色粘土であった。

住居跡の分布は、中央部の平坦部には少なく東側と西側の緩やかな傾斜面に認められた。西側の幅狭な部分からは古墳時代後期の鬼高、真間期の住居跡5軒と平安時代の住居跡2軒、東側では奈良～平安時代の住居跡が9軒認められ、共に複合関係がみられる。中央部には奈良～平安時代の住居跡5軒が検出され、住居跡は三ヶ所に偏在を示していた。また西側の一部は炭窯の粘土採取の為かなり搅乱が見られた。

住居跡プランは方形状が大半を占めたが長方形プランも2軒みられた。竈は北側ないし北西側が大半を占めたが15、17、22号住居跡のように東壁側に付設するものもあった。また竈はローム層を掘りこんだ円形炉状のものと逆「U」字状に粘土を用いて付設するもの、袖部のみ粘土を使用するなどの特徴も認められた。

柱穴は小型の住居跡では隅部に掘り込むもの、検出でされなかつた住居跡などもあり、全体に浅い掘り込みが多かった。

遺物は各遺構とも少なく、土師器に比べ須恵器の割合も多かつたが大半は破片であり、接合により器形の窺えるものも少なかつた。

鉄器は3点、石器は2点と非常に少なかつた。

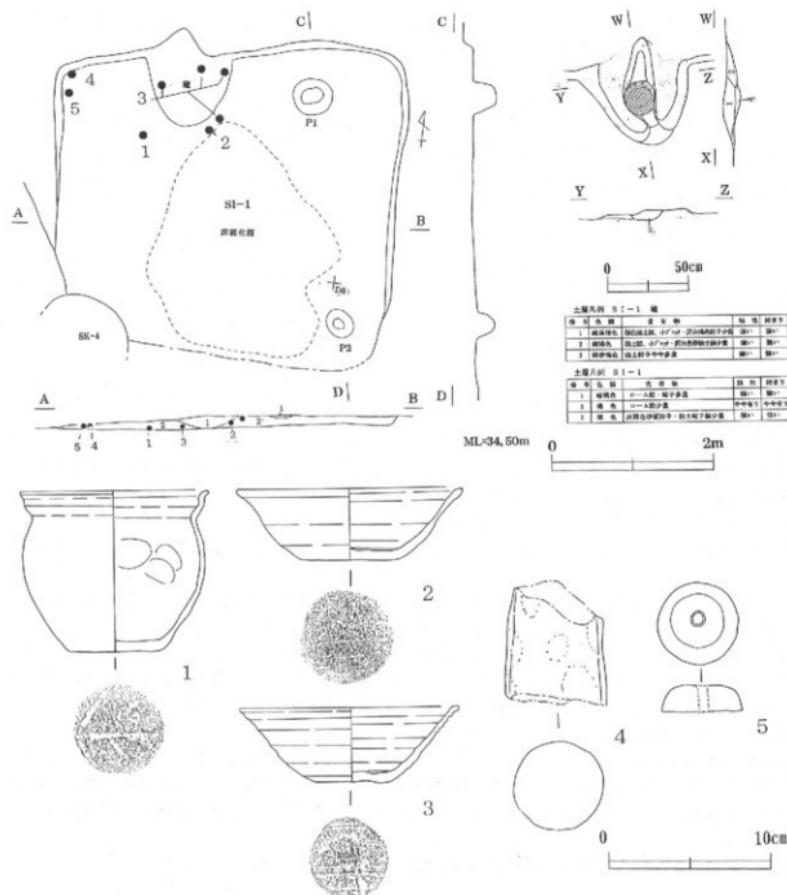
以下、各住居跡の概要について述べる。

1 住居跡と出土遺物

1号住居跡と出土遺物(第3図・図版2、8)

本跡は調査区中央部グリットD8区に位置し、西南側にゆるく傾斜する。北側では2号住居跡を掘り込み西側では3号住居跡に掘り込まれ複合関係にある。規模は東西4.4m、南北4.1mの方形状プランを呈し主軸をN-1°-Wに置く。壁高は北側で15cmと低い。

床面は、ほぼ平坦で竈の前面及び中央部が良く踏み固められている。壁溝は確認できなかった。ピットは、2ヶ所東壁側に認められP1は径50cm、深さ30cmの長円状。P2は径35cm、深さ25cm。



第3図 1号住居跡・出土遺物実測図

竈は、北壁の西寄りに位置して半円状に付設され焚口から煙道部まで130cm、袖部幅70cm、外部への掘り込みは30cm、火床部は中央に位置し10cm程掘り込み、火熱を受け赤褐色を呈し硬い。

覆土は、3層であるが大半は2層が占め、竈前面では砂質粘土がみられた。全体に粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器片120(甕110・壺10)須恵器片21(甕2・壺19)がみられた。いずれも竈周辺または内部から出土している。1は竈前面から出土した小型の甕形土器で、口唇部は尖り開き器肉は薄い。2・3は須恵器壺でロクロ成形、口縁部は開く。4・5は西北隅部から出土している支脚と紡錘車で土製。

本跡は複合関係、出土遺物から10世紀初頭の時期が考えられる。

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土、色調、焼成	備考
1	土師器 甕	A 11, 5 B 10 C 5, 5	器肉の薄い小型甕 頸部の括れは弱く安定した平底 木葉痕 口唇部は外反尖る	ヘラナデ 指頭調整	細石多量 暗褐色 良	60% 床直
		A 14 B 4, 5 C 5, 5	安定した平底 体部は外反して立ち上がる 口唇部は弱く膨らむ	静止ヘラ切り ナデ調整	細石多量 灰青色 良	
		A 13, 5 B 4, 5 C 4, 5	小さめの底部から直線的に開く 口唇部は弱く膨らむ	静止ヘラ切り ナデ調整	細石中量 灰白色 良	
4	支脚	径 5, 5 遺存長7	上下欠失、円形	ナデ調整	精選 暗褐色 良	20% 床直
		径 3, 3 高さ 1, 5 底径 5	土製でほぼ円形 孔径0, 6 cm	ナデ調整	雲母少量 黒褐色 良	
5	紡錘車					完形 床直

第1表 1号住居跡出土遺物観察表

2号住居跡と出土遺物（第4図・図版2、8）

本跡は調査区中央部グリットC8区に位置し、南側にゆるく傾斜する。南側では1号住居跡の一部を埋めて複合関係にある。プランは東西4.5m、南北4mの方形状を呈し主軸をN-40°-Wに置く。壁高は東側で15cmと低い。南西側は明確ではない。

床面は、ほぼ平坦で竈前面から南側の中央部が良く踏み固められている。壁溝は確認できなかつた。

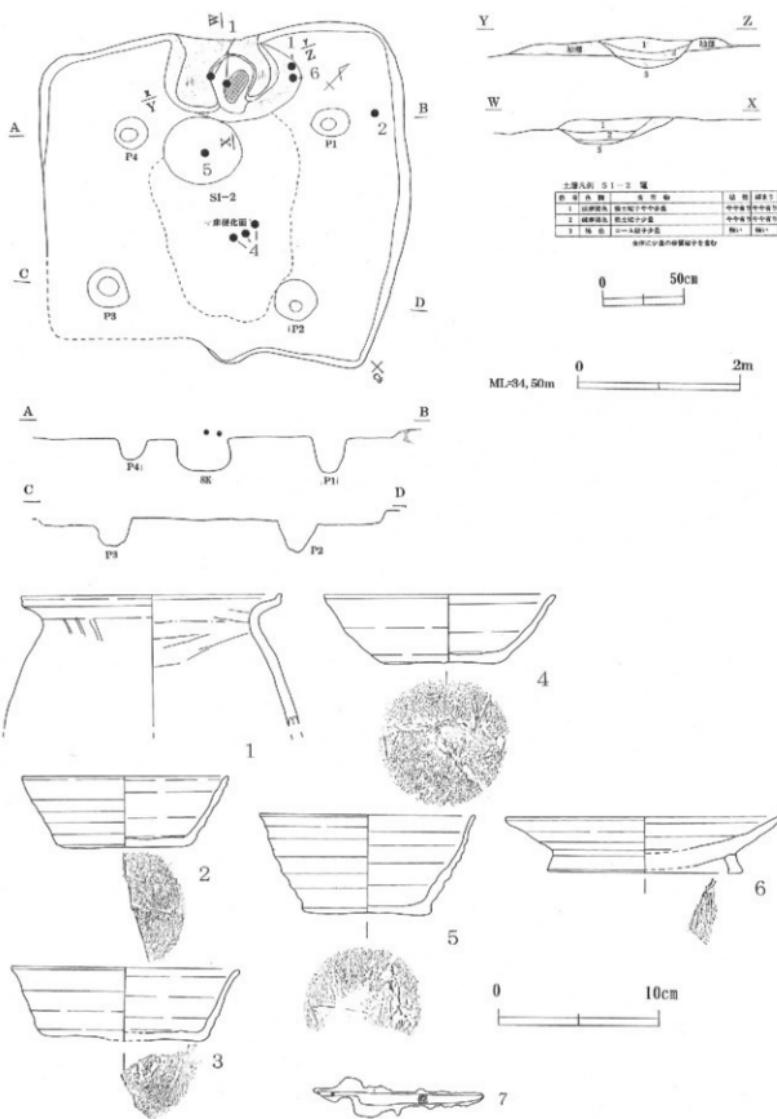
ピットは、4ヶ所認められ、P1は長径50cm、深さ45cmの長円形。P2は径50cm、深さ30cmの円形。P3は径50cm、深さ30cmの円形。P4は径40cm、深さ25cmの円形。「U」字状掘り込みで主柱穴と考えられる。その他、竈前に土坑状のピットがあり径1.5cmの円形を呈する。

竈は、北西側壁面中央部に位置して梢円状に付設され明確な煙道部は認められない。焚口は一段低く中央部を35cmほど掘り込み、火床部は中央に位置、火熱を受けて赤褐色を呈し、硬い。

覆土は、1層で褐色、粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器片174(甕156・壺18)須恵器片27(甕9・壺18)がみられた。中央部と竈から出土している。2・3・4は須恵器壺、底部は回転ヘラ切り、5は鉢に近い器形。6は竈袖部から出土した台付皿。鉄器は長さ10.5cm、四角形で長さ7.8cm。先端は丸味を帯び刀子と思われる。

本跡は複合関係、出土遺物の特徴から9世紀初頭の時期が考えられる。



第4図 2号住居跡・出土遺物実測図

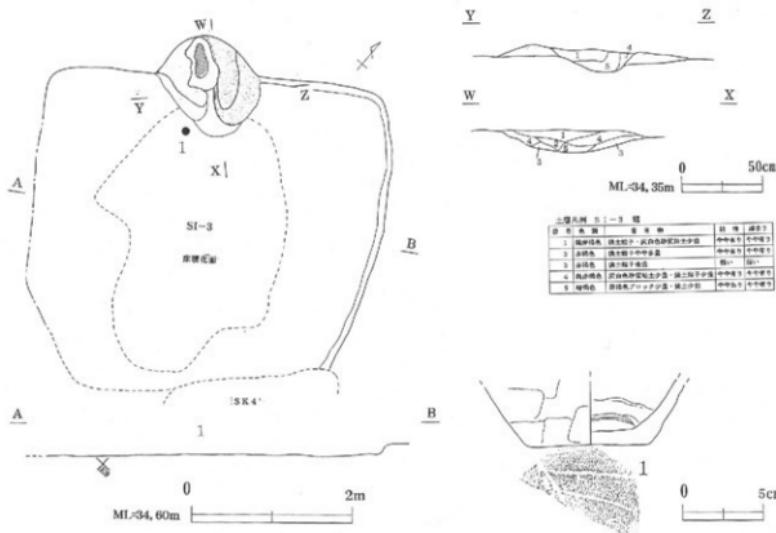
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土、色調、焼成	備考
1	土器盤	A 16 B	口縁部強く外反、口唇部尖る 剥落多く成形痕不明確	外面不明 内面ナデ	細石極少量 鈍い赤褐色 普通	20% 竈中
		C 7, 5	安定した平底から緩く立ち上がる ロクロ成形痕を顕著に残す 底部ナデ		細石少量 灰青色 良	
2	須恵器 坏	A 12, 5 B 4, 3 C 7, 5	やや凹凸気味の底部から直立 弱く内湾して立ち上がる 口唇部は丸く取める	ナデ	細石少量 灰青色 良	50% 覆上
		A 14 B 4, 5 C 10	外反して立ち上がり器肉は一定 口唇部は丸く取れる成形痕は不明瞭 底部は回転ヘラ切り痕を残す		細石・雲母中量 灰青色 普通	
		A 14, 4 B 4, 2 C 6, 5	安定した平底から内湾気味に 器肉を鍛じて立ち上がる 口唇部は丸く取れる		細石少量 灰白色 良	
5	須恵器 坏	A 13, 5 B 6 C 8	外反して立ち上がり器肉は一定 口唇部は丸く取れる 底部は回転ヘラ切り痕を残す	回転ヘラ切り ナデ	細石・雲母中量 灰青色 普通	60% 覆土
		A 17 B 3, 5 C 12	脚部は短くへの字状 付け高台		細石極少量 灰白色 良	

第2表 2号住居跡出土遺物観察表

3号住居跡と出土遺物（第5図・図版2、8）

本跡は調査区中央部グリットE 9区に位置し、南西側にゆるく傾斜をしている。東側では1号住居跡を掘り込み4号土坑に掘り込まれ、複合関係にある。プランは東西約4.4m、南北約4mの方形状と推察される。主軸をN-30°-Wに置く。壁高は北側で10cmと低い。

床面は、ほぼ平坦で竈の前面及び中央部が良く踏み固められている。櫻溝は確認できなかった。柱穴は、認められなかった。



第5図 3号住居跡・出土遺物実測図

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎上、色調、焼成	備考
1	土師器 壺	A B C 7, 5	底部木葉痕 横位にヘラ削り 長胴形器形か	ヘラ削り ナデ	砂中量 赤褐色 良	10% 竈前

第3表 3号住居跡出土遺物観察表

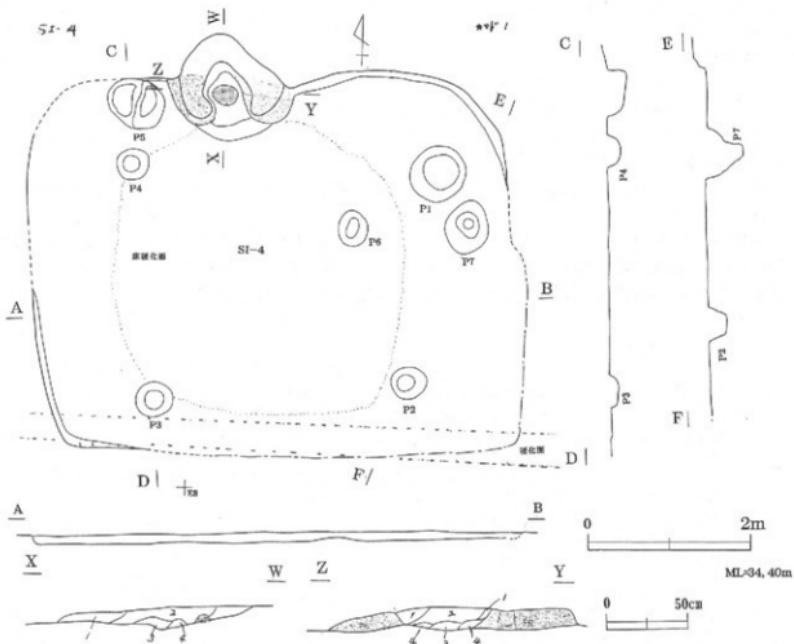
竈は、北西側の壁面中央部に位置して円形状に付設され、焚口から煙道部まで 100cm、袖部幅 80cm、外部には 40cm 程突出す。焚口部は狭く火床部は長円状で 10cm 程掘り込み、火熱を受け赤褐色を呈しやや硬い。

遺物は、土師器片 52 (甕 50・坏 2) 須恵器片 4 (甕 2・坏 2) がみられた。1 は竈前面から出土した。土師器壺底部で木葉痕を持つ。

本跡は複合関係、出土遺物から 8世紀初頭の時期が考えられる。

4号住居跡と出土遺物（第6図・図版2）

本跡は調査区中央南側グリット F 7 区に位置し、南側にゆるく傾斜をしている。複合関係ではなく単独。



第6図 4号住居跡実測図

プランは東西約6m、南北約4.8mの長方形を呈し主軸をN-1°-Wに置く。壁高は北側と南西側で10cmと低い。

床面は、ほぼ平坦で竈の周辺から南にかけて良く踏み固められている。壁溝は確認できなかった。

ピットは、6ヶ所認められP1・P2・P3・P4が主柱穴で1は径70cm、深さ20cmで円形、2は径40cm、深さ20cmの楕円形、3は径45cm、深さ13cmの円形、4は径40cm、深さ15cmの円形。P5は長径70cm、深さ20cmで2段に掘り込まれている。貯蔵穴の名残か。P7は支柱穴か、径70cm、深さ45cm。南側に礎面が認められ旧道の跡と思われる。

竈は、北壁の中央部西寄りに位置し楕円状に付設され、焚口から煙道部まで120cm、袖部幅150cm、外部へは半円状に50cm張出す。袖は火床部を抱える感じに付設、焚口部はやや高く、火床部は中央に位置し5cm程掘り込み、火熱を受け淡い赤褐色を呈し焼き縮まりは弱い。

覆土は、1層で褐色、粘性、縮まりはやや強い。

遺物は、土師器片119(甕111・坏8)須恵器片10(甕1・坏9)がみられたが図示出来る物はなかった。

本跡は確認調査時に中央部を試掘溝で床面が検出され、掘り込みは浅く遺物も器形を窺えるものが少なかった。プラン、竈、主軸などから8世紀中葉から後半の時期と思われる。

5号住居跡と出土遺物(第7図・図版2、8)

本跡は調査区東北側グリットB4区に位置し、東北側にゆるく傾斜している。北西側の1号溝を掘り込み複合関係にある。プランは東西3.4m、南北3.4mの方形形状を呈し、主軸をN-13°-Wに置く。壁高は西側で30cm、東側で15cmを測る。

床面は、竈前面のみが良く踏み固められている。壁溝は南側中央部のみで幅15~20cm、深さは5cm前後。

ピットは、南西に1ヶ所認められP1径45cm、深さ15cmの円形状。

竈は北壁中央部に位置して楕円状に付設され、焚口から煙道部まで130cm、袖部幅135cmで大半は壁外に掘り込み焚口部は幅が15cmと狭い。火床部は円形状に掘り込み、火熱を受け赤褐色を呈し焼き縮まりは弱い。

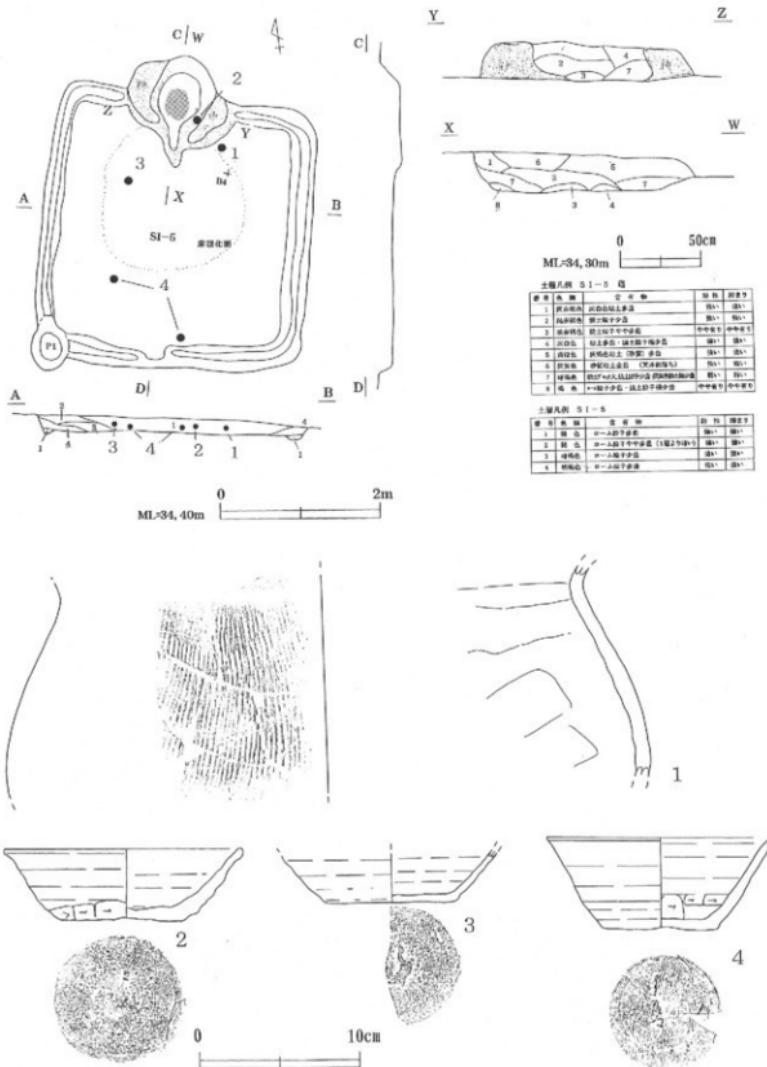
覆土は、8層に分けられたが大半は1層で灰白色の粘土粒子を含む層で2・3層は西壁にみられ人為的。

遺物は、土師器片268(甕223・坏45)須恵器片64(甕38・坏26)がみられ、図示したものには須恵器甕の縦位の叩き目、坏は底部にヘラ切り痕、ヘラ削りがみられる。

本跡はプラン、須恵器の特徴などから8世紀末の時期が考えられる。

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土、色調、焼成	備考
1 須恵器 甕	A		頸部32cm大甕と考えられる	タタキ目	雲母極少量	
	B		外面平行沈線タタキ目	ヘラ削り	灰褐色	
	C		内面ヘラ削り調整		普通	胴10%竈袖
2 須恵器 坏	A	14,7	底部回転ヘラ切り 体部外反し	回転ヘラ切り	細石・長石中量	
	B	4,5	器肉を減じて立ち上がる	手持ちヘラ削り	灰青色	
	C	7,5	リコア形成痕が内外顕著		良	ほぼ完 地中
3 須恵器 坏	A		底部から外反して立ち上がる	回転ヘラ切り	細石多量	
	B		器肉は全体に薄い	ナデ	灰青色	
	C	8			良	60%覆土
4 須恵器 坏	A	14	小型の鉢状器形	回転ヘラ切り	細石中量	
	B	5,7	体部の成形痕は弱い	ナデ	鈍い黄褐色	
	C	6,8		内面ヘラナデ	良	50%覆土

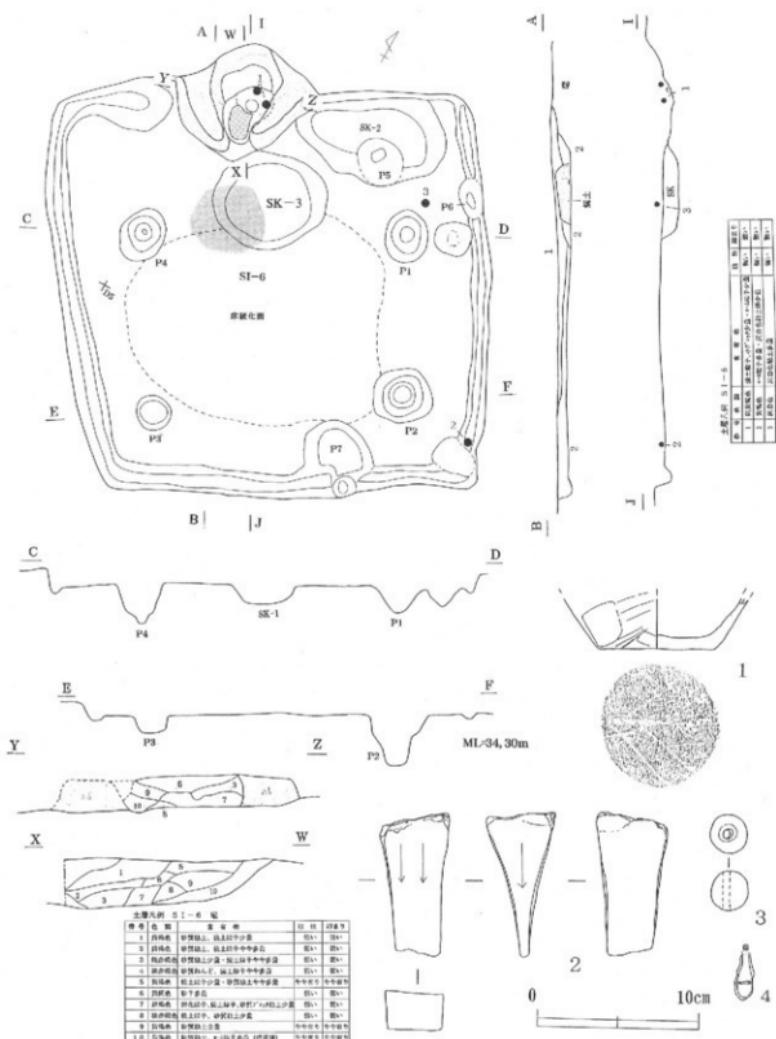
第4表 5号住居跡出土遺物観察表



第7図 5号住居跡・出土遺物実測図

G号住居跡と出土遺物 (第8図・図版3、8)

本跡は調査区東側グリットD4区に位置し、東側にゆるく傾斜している。東側で14号住居跡と複合関係にありプランは東西5.4m、南北5mの方形形状を呈し主軸をN-33°-Wに置く。壁高は西側25cm、東側15cmを測り、本遺跡では高い部類に入る。



第8図 6号住居跡・出土遺物実測図

床面はほぼ平坦、中央部が梢円状に良く踏み固められている。壁溝は幅15~20cm程で「U」字状に巡る。

ピットは、5ヶ所認められP1は径60cm、深さ35cmの円形。P2は径70cm、深さ65cmの梢円形で2段に掘り込む。P3は径45cm、深さ20cmの円形状で浅い。P4は径70cm、深さ45cmで長円形。P5は竈東側にみられる径55cm、深さ40cm。南壁面に貯蔵穴状の掘り込みP7が見られた。

竈は、北壁に位置して梢円状に付設され、焚口から煙道部まで140cm、袖部幅170cmと広い。外部へはゆるく張出す。焚口部は30cmと狭い。火床部は中央部に位置し、火熱を受け赤褐色を呈し焼き縮まりは強い。

覆土は、3層で焼土粒子、灰白色粘土が含まれ人為的。粘性、縮まりは強い。

遺物は、土師器片826(甕735・坏91)須恵器片122(甕39・坏83)がみられたが図示できるものは少ない。本遺跡では唯一の砥石がみられ、良く使い込まれている。4は鉄族の一部で遺存長2.7cmで西壁、壁溝から出土。

本跡は複合関係、出土遺物プランの特徴から9世紀初頭の時期と考えられる。

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土、色調、焼成	備考
1 土師器 甕	A		底部のみ やや外反気味に立ち上がる 器肉は薄い	ヘラ削り ナデ	細石多量 黒褐色 普通	10% 甕中
	B		底部に木葉痕			
	C 7.2					
2 砥石	長さ 8.7 最大幅 4.2	四面に使用痕有 三角形状に薄くなり使い込まれている	凝灰岩			ほぼ完形 壁溝
3 丸玉	径2.2×2.4 孔径0.4 重さ12g	やや長円状 不整形	ナデ	砂多量 鈍い橙色		ほぼ完形 覆土

第5表 6号住居跡出土遺物観察表

7号住居跡と出土遺物(第8図・図版3、8)

本跡は調査区東端グリットC3区に位置し、東側にゆるく傾斜している。10号住居跡を掘り込み西側では14号住居跡と複合関係にある。プランは東西4.9m、南北4.6mで隅丸方形を呈し主軸をN-30°-Wに置く。壁高は西側で30cm、東側で25cmで本遺跡では高い。

床面は、ほぼ平坦で中央部が良く踏み固められている。壁溝は東側を除き幅10~15cm、深さ5cm程で「U」字状に巡る。

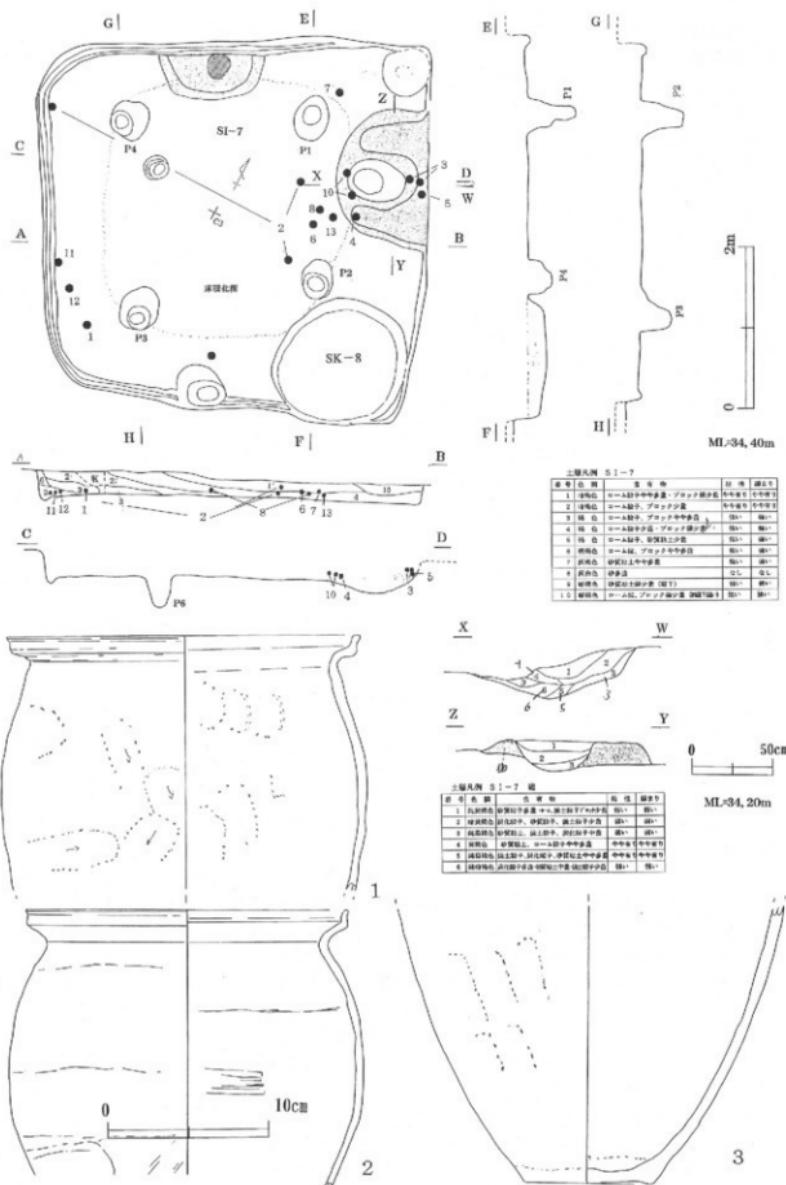
ピットは、4ヶ所認められ、P1は長径55cm、深さ60cmの長円形、P2は径50cm、深さ30cmで2段に掘り込む。P3は径50cm、深さ40cmの円形。P4は径45cm、深さ50cmの梢円形状。掘り方は「U」字状を呈する。

竈は東側と北側の2ヵ所にみられ共に半円状に付設、外部への掘り込みは無い。東側の竈は焚口から煙道部まで90cm、袖部幅170cm。焚口部は50cmと広い。火床部は前面に位置、火熱を受け赤褐色を呈し焼き縮まりは強い。北竈は砂質粘土で覆われ袖部、焚口は明確でなく中央下部に火床部らしい赤褐色の焼土が認められたが焼き縮まりは弱い。

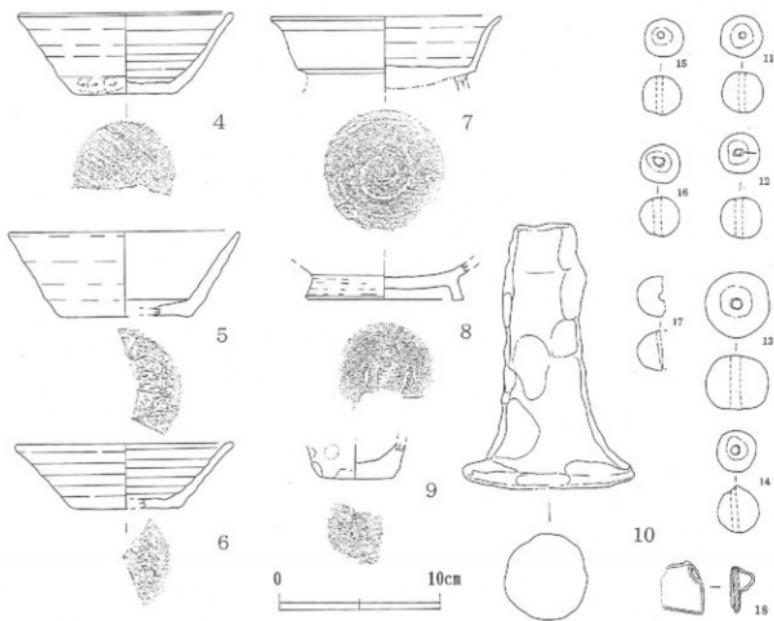
覆土は、10層に分けられ、ほぼ東側に流れるような自然埋積を示し大半は暗褐色、褐色層で粘性、縮まりはやや強い。

遺物は、土師器片590(甕506・坏84)須恵器片123(甕26・坏97)がみられた。図示したものは竈又は前面、西壁側から出土。1・2の甕は器肉が薄く長胴形、口唇部は開き気味で尖る。須恵器坏は口縁部が開き器肉は薄く、底部は回転ヘラ切り。また手捏土器、土製丸玉が7点出土している。不明の鉄片18が見られた。鎌か。

本跡は複合関係、土師器甕、須恵器坏などの特徴から8世紀中葉の時期と考えられる。



第9図 7号住居跡・出土遺物実測図



第10図 7号住居跡出土遺物実測図

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
1	土師器 甕	A 23	肩部の張は弱く口縁部「く」の字状外反 口唇部つまみ出す内外に輪積調整痕を残す	ナデ調整	細石・雲母中量 暗褐色 普通	20% 床直
		B				
		C				
2	土師器 甕	A 20	1同様の器形で口唇部は上方につまみ出す 器内は5mmと薄い 器面は二次焼成で粗雑	ナデ 指頭圧痕	細石・長石多量 外褐色 内暗褐色 普通	40% 竈中
		B				
		C				
3	土師器 甕	A	口頸部欠失しているが長胴形か	ナデ	細石多量	
		B	小さめの底部から内湾して立ち上がる 器肉はやや厚く器面粗雑	押圧	灰褐色 内明褐色 普通	50% 竈中
		C 8				
4	上師器 坏	A 13, 4	平底から外反して立ち上がり	ナデ	細石中量	
		B 5	口唇部は丸く収まる	回転ヘラ切り	暗褐色 普通	50% 竈袖
		C 6, 4	体部にはゆき成形痕が顕著	ヘラ調整		
5	須恵器 坏	A 14, 4	内外底とも剥落多く調整痕不明	不明	雲母極少量	
		B 5, 2	体部から器肉を減じて口縁部に移行		灰褐色 普通	40% 竈中
		C 8				
6	須恵器 坏	A 13, 5	体部は強く外反	回転ヘラ切り	雲母・細石少量	
		B 4	口唇部は弱く膨らむ		灰褐色 良	30% 覆土
		C 6, 5	内外ともゆき成形痕を顯著に残す			
7	須恵器 高台坏	A 14, 2	高台を欠失 体部は弱く外反	回転ヘラ切り	雲母・細石多量	
		B 4, 5	口縁部は開き口唇部は丸く收める	ナデ	青褐色 良	60% 覆土
		C 9, 5	底部は回転ヘラ切り 付け高台			
8	須恵器 高台坏	A	高台は「く」の字状に弱く開き短い	回転糸切り	細石極少量	
		B	体部は欠失 №7に近い器形か	ナデ	灰緑色 良	30% 覆土
		C 9, 7	付け高台			
9	土師器 手捏	A	口縁部欠失 底部は平底ナデ調整	手捏	砂中量	
		B	約1/2程を欠失 形状は不明	指頭圧痕	淡い赤褐色 普通	50% 覆土
		C 4, 3				
10	土製 支脚	A 3, 7	縦焚口から上下分かれて出土	圧痕	砂・細石・雲母少量 鈍い赤褐色 普通	ほぼ完 竈前
		B 16, 5	指頭などの押圧で凹凸が激しい			
		C 10, 5	不整形 底部は鉛状に広い			
11	土製 丸玉	径2.5×2.6	球形状 やや磨耗	ナデ	砂中量 黄褐色 普通	
		孔径 0.4				12 g
12		径2.5×2.6	球形状 やや磨耗	ナデ	砂中量 黄褐色 普通	
		孔径 0.4				13 g
13		径 5×3.3	潰れた球形状 やや磨耗	ナデ	砂中量 淡い橙色 普通	
		孔径 0.6				42 g
14		径2.4×2.8	孔部尖る 球形状 やや磨耗	ナデ	砂中量 黄褐色 普通	
		孔径 0.4				10 g
15		径2.4×2.3	ほぼ球形状 やや磨耗	ナデ	砂中量 黄褐色 普通	
		孔径 0.4				10 g
16		径2.4×2.3	孔長円 ほぼ球形状 やや磨耗	ナデ	砂中量 黄褐色 普通	
		孔径 0.6				10 g
17		径2.6×2.4	ほぼ球形状 やや磨耗 1/2欠	ナデ	砂中量 黄褐色 普通	
		孔径 0.4				8 g

第6表 7号住居跡出土遺物観察表

8号住居跡と出土遺物（第11図・図版3）

本跡は調査区東南側グリットE-4区に位置し、南側にゆるく傾斜している。東隅部で12号住居跡と複合関係にある。プランは東西6.3m、南北5.2mの長方形状を呈し主軸をN-22°-Wに置く。確認時床面が検出され明確に壁高を測れる所はなかった。

床面は、ほぼ平坦で兩部を除き良好踏み固められている。壁溝は確認できなかった。

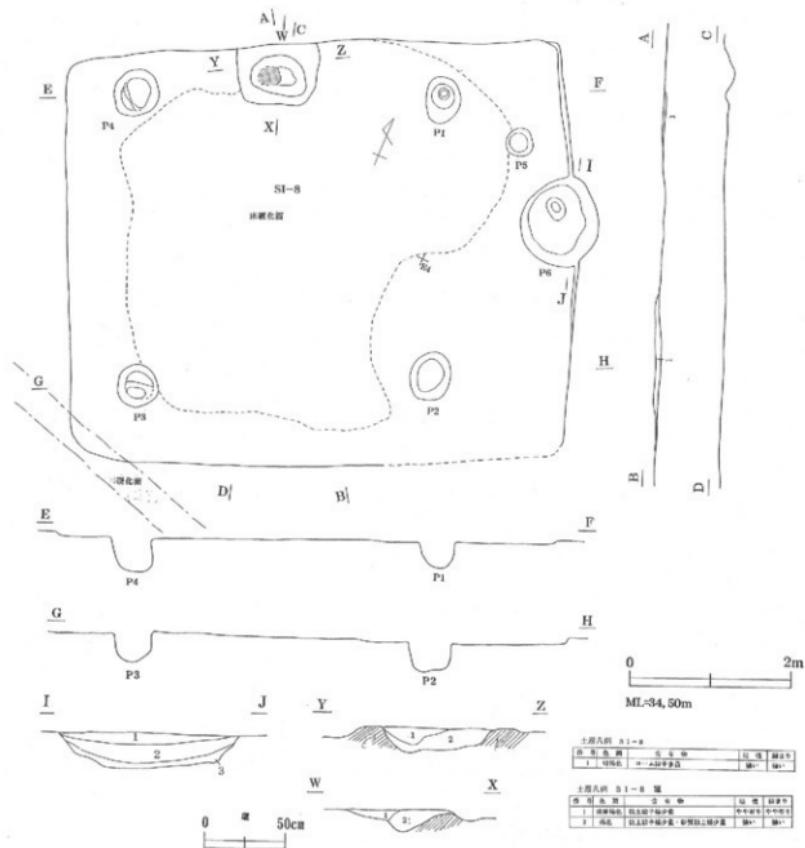
ピットは、6ヶ所認められP1は長径50cm、深さ30cmの楕円形、P2は長径60cm、深さ5cmの楕円形、P3は径45cm、深さ35cmN0円形状、P4は径50cm、深さ40cmの円形状、P5は径30cm、深さ25cm、P6は東西95cm、南北110cm、深さ50cmの楕円形で土坑状。本跡に伴うものか不明。

竈は、北壁中央やや西寄りに位置し半円状に付設され、外部への張り出しあは認められなかった。袖部が楕円形状に巡り明確な焚口、煙道部は把握できなかった。火床部は中央に位置し火熱を受け淡い赤褐色を呈し焼き締まりは弱い。

覆土は、1層で褐色、粘性、締まりはやや強い。

遺物は、土師器片14（甕12・坏2）須恵器の甕、坏は認められなかった。図示できるものは無い。

本跡は遺構プラン竈や複合関係、出土遺物から8世紀中葉から後半の時期が考えられる。



第11図 8号住居跡実測図

9号住居跡と出土遺物（第12図・図版4）

本跡は調査区東側のグリットE3区に位置し、東側にゆるく傾斜している。住居跡、土坑等との複合関係は無い。プランは辺3m、隅丸方形を呈する小型の遺構。主軸をN-49°-Wに置く。壁高は西側で15cm、東側で10cmと低め。

床面は、中央部がやや低く、竈前面及び中央部が踏み固められている。壁溝は確認できなかった。

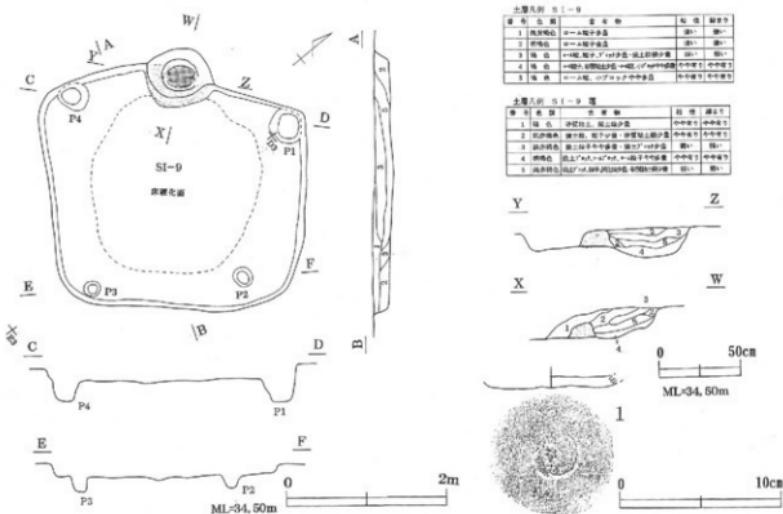
ピットは、4ヶ所認められP1は径40cm、深さ30cm円形、隅部に位置。P2は25cm、深さ15cm円形。P3は径20cm、深さ20cmの円形状。P4は径40cm、深さ25cmの梢円形。掘りこみはいずれ「U」字状を示す。

竈は北西の壁面に位置し円形状に付設され、外部にも半円状に30cm程張り出す。袖部幅80cm、火床部は中央に位置し径45cm程で円形状に掘込まれ、下部は火熱を受け赤褐色を呈しているが焼き縮まりは弱い。

覆土は、5層に分けられたが大半は3・5層が占め、レンズ状の自然埋積を示す。粘性、締まりはやや有る。

遺物は、上師器片98（甕82・坏16）須恵器片11（甕3・坏8）がみられた。いずれも小片で図示できるものは少なく、底部の回転ヘラ切りのみ。

本跡は、プラン、竈の付設状態、主柱穴、遺物の特徴などから10世紀末の時期が考えられる。



第12図 9号住居跡・出土遺物実測図

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土、色調、焼成	備考
1	須恵器 坏?	A B C 7, 5	底部のみ 器形不明 坏か	回転ヘラ切り	細石・雲母少量 灰褐色 良	15% 覆土

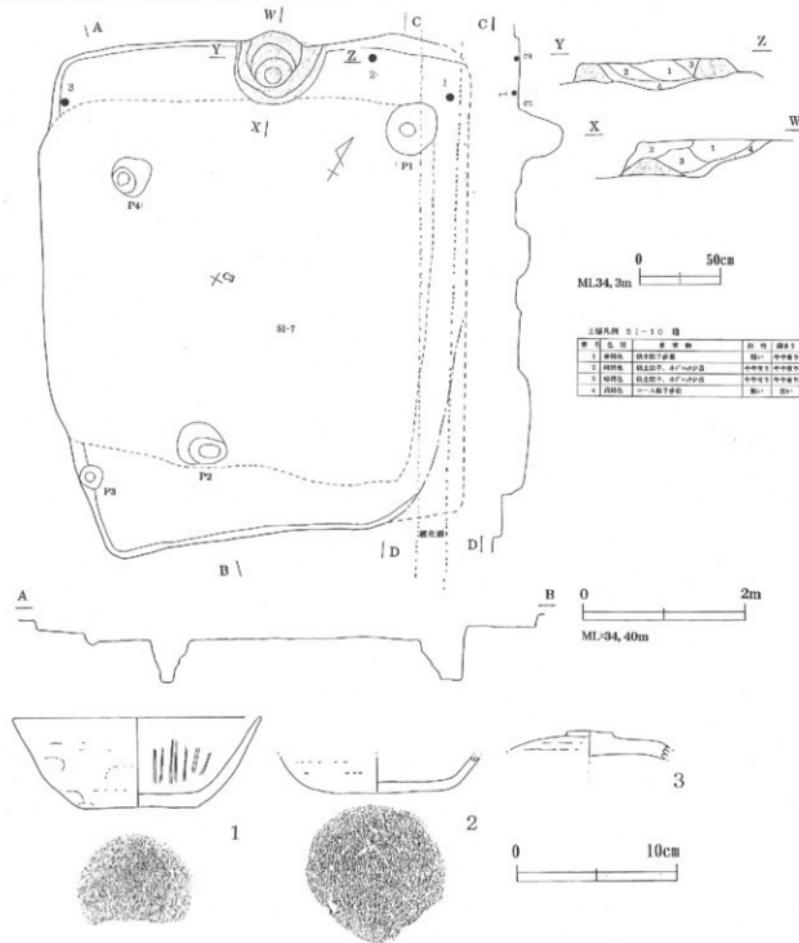
第7表 9号住居跡出土遺物観察表

10号住居跡と出土遺物（第13図・図版4）

本跡は調査区東側グリットC 37区に位置し、東側にゆるく傾斜している。中央部大半は7号住居跡に掘り込まれ東側と南北に幅狭く遺存する。プランは東西5.2m、南北6.1mの不整形な長方形か。東側の一部は道路によって削平されている。主軸をN-60°-Wに置く。壁高は南側で15cm、北側で5cmと低い。

床面の大半は欠失。南北の遺存部では縫まりが悪い。壁溝は認められなかった。

ピットは、4ヶ所認められたが主柱穴は1・2・4でP1は径60cm、深さ60cmの円形状。P2は長径60cm、深さ70cmの楕円。P4は長径50cm、深さ60cmの楕円。いずれも「U」字状の掘り込み。P3は西側壁面竈に掘り込まれた径30cm、深さ15cm程の小穴。



第13図 10号住居跡・出土遺物実測図

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土、色調、焼成	備考
1	土師器 碗	A 14,3	丸底気味の底部から弱く外反して 口縁部に移行 口唇部は器肉を減じ 丸く収める 内面縦位のヘラ磨き	ヘラ削り ナデ ヘラ磨き 回転糸引き	精選 黄褐色 良	30% 覆上
		B 6	やや凹凸気味の底部から外反し 立ち上がる 口縁部欠失	ナデ 回転ヘラ切り	雲母・細石中量 鈍い橙色 普通	
		C 7	摘み径 3 # 高0,4	ナデ	細石多量雲母少量 黄橙色 良	
2	須恵器 壺	A	やや凹凸気味の底部から外反し	ナデ	雲母・細石中量 鈍い橙色 普通	40% 床直
		B	立ち上がる 口縁部欠失	回転ヘラ切り	40% 床直	
		C 8	摘みは扁平 膨らみは弱い	ナデ		
3	土師器 蓋	摘み径 3	摘みは扁平 膨らみは弱い	ナデ	細石多量雲母少量 黄橙色 良	10% 床直
		# 高0,4				

第8表 10号住居跡出土遺物観察表

竈は北壁中央に位置し半円状に付設され、袖部幅100cm、外部へは10cm程張り出す。焚口部はやや高く、火床部は中央やや前に位置し火熱を受け赤褐色を呈する。

覆土は、4層確認されたがいずれも南北側1m程で赤褐色、暗褐色、黄褐色で粘性、締まりはやや有る。東側道路に沿って表土から幅30cm程の硬化面が南北に認められた。(旧道)

遺物は、土師器片34(甕15・壺19)須恵器は認められなかった。図示した壺はヘラけずり、ヘラ磨き、底部はナデ調整。蓋の摘みは扁平。

本跡は複合関係、出土遺物の特徴などから8世紀初頭が考えられる。

11号住居跡と出土遺物(第14図・図版4)

本跡は調査区東側端部グリットE 27区に位置し、東側にゆるく傾斜をしている。ほぼ1/2を道路によって欠失。プランは明確ではないが竈と床面の硬化度から主軸をN-60°-Wに置くと思われる。壁高は南側で5cmを測るが、他方位では確認できなかった。複合関係は無い。

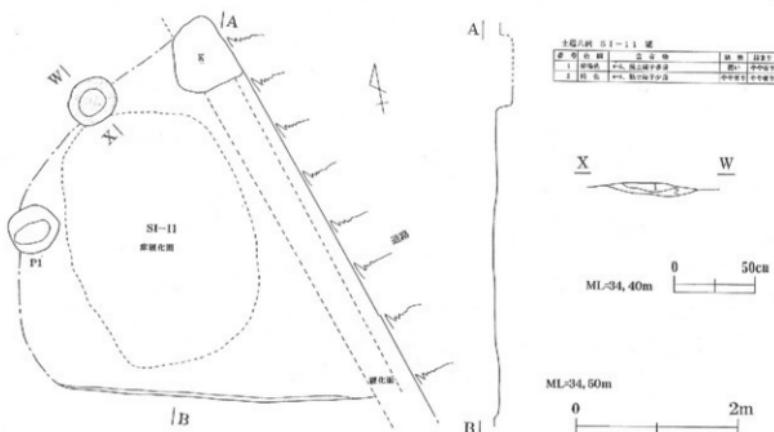
床面は、ほぼ平坦で竈前から南側に良く踏み固められている。壁溝は確認できなかった。

ピットは、竈西側に1ヶ所認められ径60cm、深さ20cmの円形。反対側には拔根による搅乱坑がみられた。

竈は、北壁に位置し砂質粘土が少量認められた。梢円形状で袖部幅60cm。明確な焚口、煙道部は認められず、赤褐色の焼土が中央に見られ火床部と思われる。火熱を受け赤褐色を呈し、焼き締まりは無い。

覆土は1層、最大厚さ5cmで褐色、粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器片39(甕33・壺6)須恵器片9(甕4・壺5)がみられた。いずれも細片で



第14図 11号住居跡実測図

図示できるものは無かった。

本跡は出土遺物、竈の特徴から8世紀から9世紀代と思われる。

12号住居跡と出土遺物（第15図・図版4、8）

本跡は調査区東側グリットF3区に位置し、南側にゆるく傾斜している。西側で8号住居跡に一部を埋め複合関係にある。プランは東西4.2m、南北4.9mを呈し、隅丸方形。主軸をN-32°-Eに置く。壁高は北側で5cmと低い。

床面は、ほぼ平坦で竈前面及び中央が円形状に良く踏み固められている。壁溝は確認できなかつた。

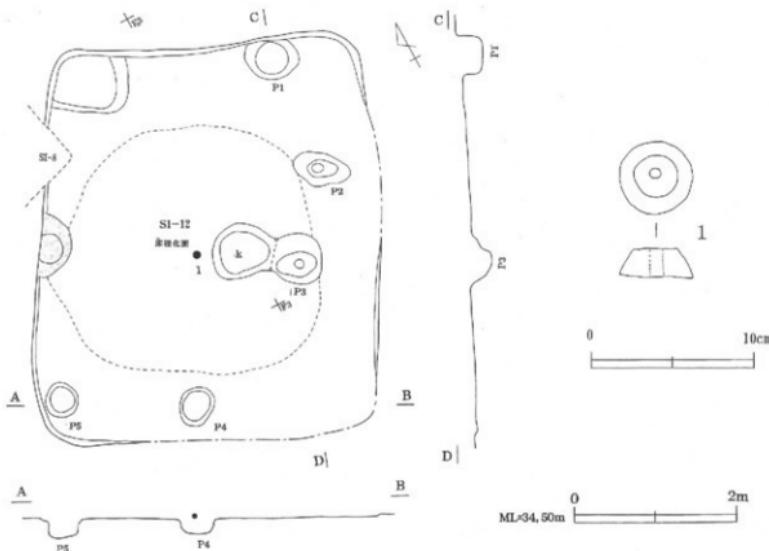
ピットは、5ヶ所認められたが主柱穴と思われるものは無い。P1は長径70cm、深さ35cm。P2は長径70cm、短径40cmの長円状。中央部が深さ20cmと深い。P3は径60cm、深さ30cmでP2と似た掘り方をもつ。P4は径40cm、深さ15cm、P5は径40cm、深さ20cmで鍋底状の掘り方。

竈は、西壁中央に位置し半円状に付設され、外部への張り出しが無い。袖部幅80cm、中央に円形状の焼土がみられ火床部と思われた。火熱を受け淡い赤褐色を呈し焼き締まりは弱い。

覆土は、1層で褐色、粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器片57（甕42・壺25）須恵器片8（甕4・壺4）、中央床面から石製紡錘車が出土している。

本跡は複合関係、竈、方位、出土遺物から9世紀初頭の時期が考えられる。



第15図 12号住居跡・出土遺物実測図

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	色調	備考
1	紡錘車 滑石製	径2.8×4.5 高1.8孔0.7	ほぼ正円で台形状		灰白色	床直 46g

第9表 12号住居跡出土遺物観察表

13号住居跡と出土遺物（第16図・図版4、5、8）

本跡は調査区東側のグリットF2区に位置し、南東側にゆるく傾斜している。北東側では15号住居跡を埋めている。プランは東西3m、南北4.5mの長方形形状を呈し主軸をN-45°-Wに置く。壁高は1.5cmと低い。

床面は、ほぼ平坦で竈の前面から南壁まで踏み固められている。壁溝は認められなかった。

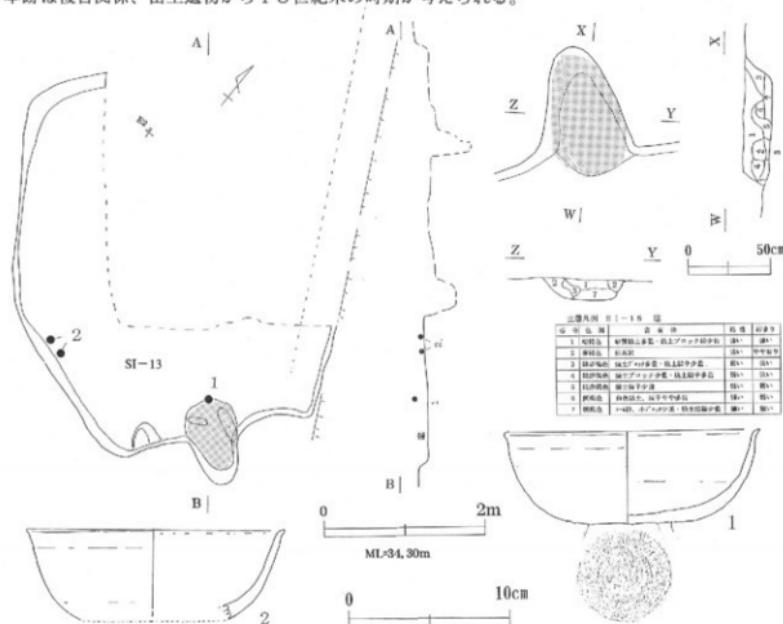
ピットは、認められなかった。

竈は、南壁に位置「U」字状に付設され、焚口から煙道部まで100cm、袖部幅70cmで外部へは「U」字状に60cm張出す。火床部は5cm程掘り込み中央に位置、火熱を受け赤褐色を呈し焼き締まりは強い。

覆土は、2層に分けられたが一部人為的な部分もみられるが大部分を占める1層は褐色で自然埋積、粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器片29（甕27・壺2）須恵器片3（甕1・壺2）がみられた。また碗形土器は回転糸切り痕を残している。

本跡は複合関係、出土遺物から10世紀末の時期が考えられる。



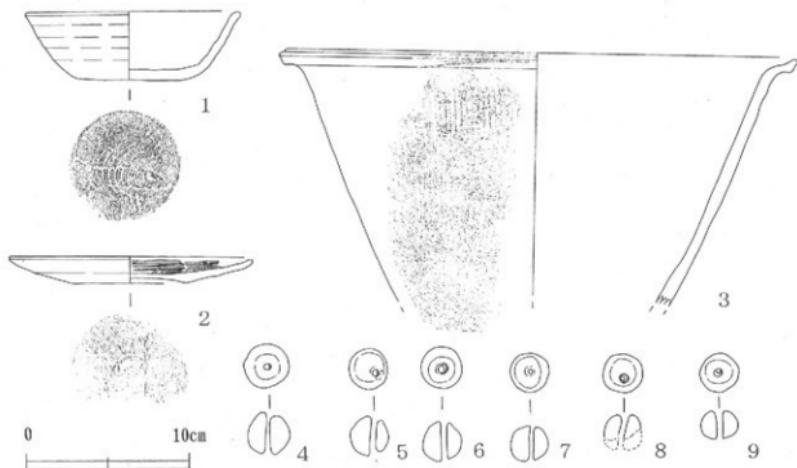
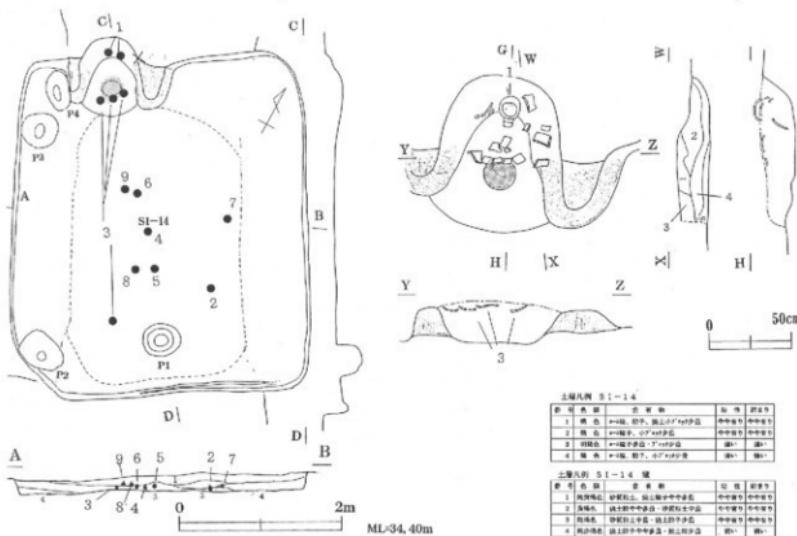
第16図 13号住居跡・出土遺物実測図

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土、色調、焼成	備考
1	土師器 高台壺	A 15.8	弱く内湾気味に立ち上がる	ナデ	砂中量 黄褐色・内黒褐色 良	50% 窯中
		B 5.7	口唇部外反尖り気味			
		C 7	ロコ成形痕を残す			
2	土師器 甕	A 16	底部が欠失しているが台付と思われる 体部は内湾気味に	ナデ	細石少量 鈍い黄褐色 普通	40% 覆土
		B	立ち上がり口唇部は閉く二次焼成			
		C				

第10表 13号住居跡出土遺物観察表

14号住居跡と出土遺物（第17図・図版5、8）

本跡は調査区東側のグリットE2区に位置し、東南側にゆるく傾斜している。東側では7号住居跡、西側では6号住居跡を掘り込んでいる。プランは東西3.5m南北4mの方形状を呈し主軸をN



第17図 14号住居跡・出土遺物実測図

-30° -Wに置く。壁高は20cmと高い。

床面は、ほぼ平坦で竈の前面から南壁まで良く踏み固められている。壁溝は南壁面に一部認められた。

ピットは、4ヶ所認められP1は長径50cm、深さ30cmの梢円形状。P2は25cm、P3は26cm、P4は竈西側に位置する長円状の小穴。

竈は、北壁に位置「U」字状に付設され、焚口から煙道部まで100cm、袖部幅140cmで外部へは半円状に50cm張出す。火床部は中央に位置、5cm程掘り込み火熱を受け赤褐色を呈し焼き締まりは弱い。

覆土は、4層に分けられたが一部人為的な部分もみられるが大部分を占める1・2層は褐色で自然埋積、粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器片251(甕170・坏81)須恵器片42(甕20・坏22)がみられた。本遺跡では唯一の皿が出土している。また坏形土器は回転糸切り痕を残している。

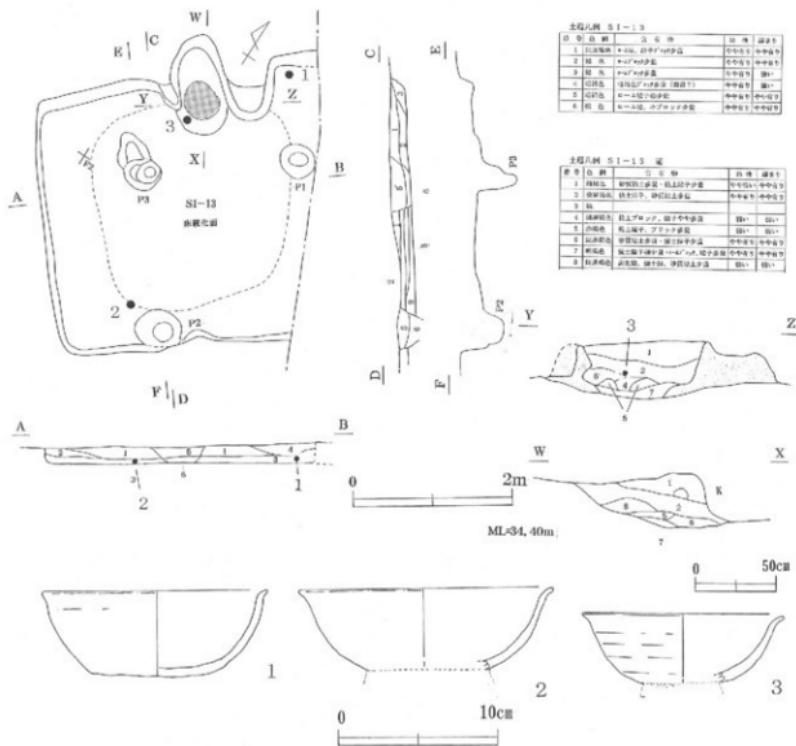
本跡は複合関係、出土遺物から9世紀末の時期が考えられる。

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	焼形技法	胎土、色調、焼成	備考
1	土師器 环	A 13, 5	平底から内湾気味に立ち上がり	回転糸切り	砂少量	90% 竈中
		B 4, 2	口唇部は外反し丸く収める	ナデ	鈍い黄橙色	
		C 6, 5	回転糸切り痕を残す		普通	
2	土師器 皿	A 15	底部は上底気味 体部はほぼ	回転ヘラ切り	精選	60% 床直
		B 1, 7	水平に近い 内面は黒色 細かな	ナデ	鈍い黒褐色	
		C 7	ヘラ磨きが施される	ヘラ磨き	良	
3	須恵質 瓶	A 32	三角形状で口縁部は水平に開き	タタキ目	雲母・細石少量	20% 竈中
		B	口唇部はつまみ出し気味	ナデ	鈍い橙色	
		C	沈線タタキ且内面は指頭圧痕	指頭押圧	良	
4	土製 丸玉	径2.8×2.6	ほぼ球形状 一部磨耗	ナデ調整	砂やや多量	覆土 15 g
		孔径0.3			橙色 良	
5	" 孔径0.4	径2.4×2.4	ほぼ球形 孔部偏る 磨耗	ナデ調整	砂やや多量	覆土 11 g
		"			橙色 良	
6	" 孔径0.5	径2.5×2.5	ほぼ球形 孔部尖る 磨耗	ナデ調整	砂やや多量	覆土 13 g
		"			橙色 良	
7	" 孔径0.3	径2.3×2.2	孔は小さめ 磨耗	ナデ調整	砂やや多量	覆土 11 g
		"			橙色 良	
8	" 孔径0.5	径2.4×2.3	30%欠失 磨耗	ナデ調整	砂やや多量	覆土 8 g
		"			橙色 良	
9	" 孔径0.4	径2.3×1.7	潰れた球形状 磨耗	ナデ調整	砂やや多量	覆土 8 g
		"			橙色 良	

第11表 14号住居跡出土遺物観察表

15号住居跡と出土遺物(第18図・図版5、9)

本跡は調査区東側グリットE2区に位置し、南側にゆるく傾斜している。南側で13号住居跡に掘り込まれ複合関係にある。東側の一部が道路によって削平されているがプランは東西約3.5m、南北3.4mの方形状を呈すると思われ、主軸をN-40°Wに置く。壁高は北側で20cmとやや高い。



第18図 15号住居跡・出土遺物実測図

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
1	土師器 碗	A 14 B 5,3 C 7	内湾気味に立ち上がり切口唇部外反 底部は凹凸気味で内側黒褐色	ナデ	靈母・砂少量 褐色 内黒褐色 良	60% 電油
2	上師器 台付碗	A 16 B C	弱く外反し口縁部は開く 口唇部は丸く収める 内側煤付着 底部に付け高台痕有り	ナデ	スコリア少量 鈍い黄褐色 内灰青色 良	20% 床直
3	土師器 台付碗	A 12,5 B C	2をやや小型にした器形 口クロ成形痕を残す 底部に付け高台痕有り	ナデ	砂多量 橙色 良	20% 窓中

第12表 15号住居跡出土遺物観察表

床面は、浅い凹凸がみられるが、竈前面から良く踏み固められている。壁溝は確認されなかつた。ピットは、3ヶ所認められP1は径40cm、深さ50cmの楕円形。P2は径50cm、深さ40cmで楕円形。P3は長径45cm、深さ50cmの楕円形。いずれも主柱穴と思われる。1ヶ所は欠失部に位置するか。

竈は、北壁中央に位置し長円状に付設され、焚口から煙道部まで120cm、袖部幅140cm、外部へは半円状に50cm張出す。左袖部は小さい。焚口部は広く、火床部は前面に位置し火熱を受け赤褐色を呈し焼き縮まりは強い。

覆土は、6層で褐色と焼土粒子、ブロック等を含む赤褐色等がみられ、一部近世の掘り込みがみられた。他はレンズ状の自然埋積、粘性、縮まりはやや有る。

遺物は、土師器片302（甕248・坏54）須恵器片24（甕6・坏18）がみられた。図示したものは土師器で碗形台付。

本跡は複合関係、出土遺物から9世紀末の時期と考えられる。

16号住居跡と出土遺物（第19図・図版5、9）

本跡は調査区中央部南側グリットF9区に位置し、南側にゆるく傾斜している。複合関係は無い。プランは東西3m、南北3mの方形を呈し主軸をN-2°-Eに置く。壁高は40cmと高い小型の住居跡である。

床面は、ゆるく東側に傾斜、白色粘土が認められたが明確な硬化面は無い。壁溝は幅15cmから25cmで巡り掘り込みは10cm前後と深い。これは粘土層のためと思われる。

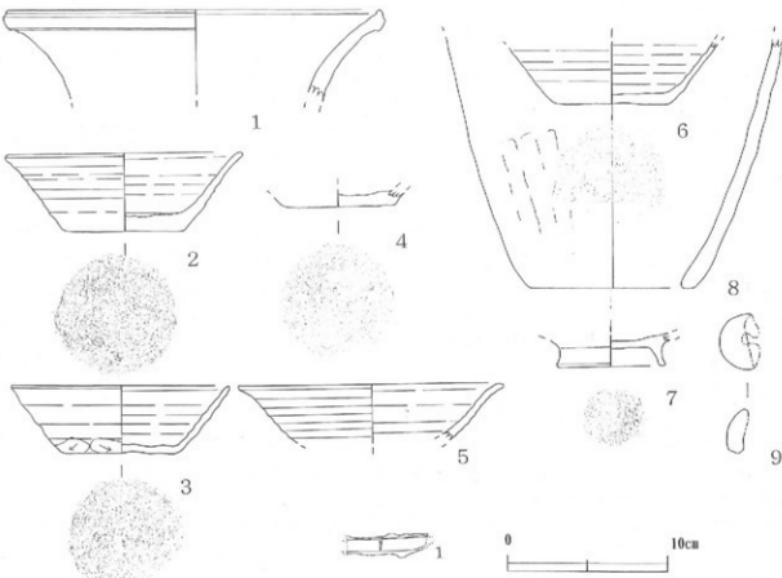
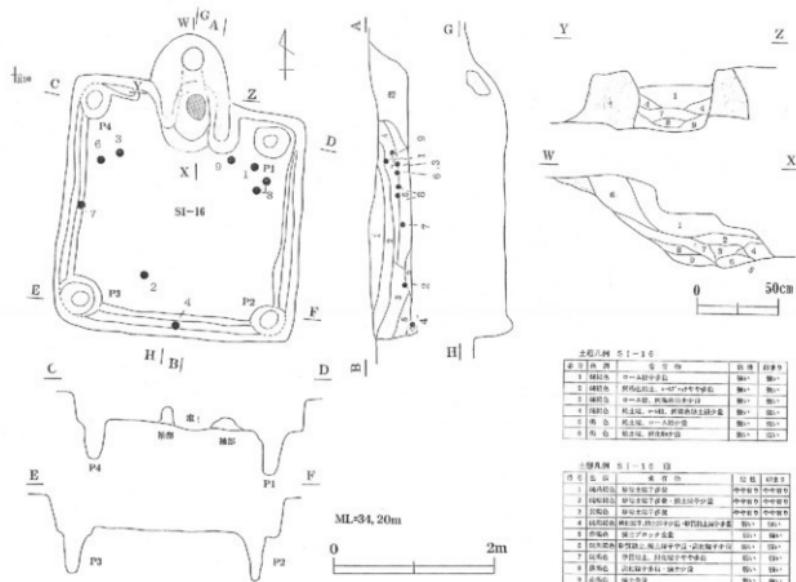
ピットは各隅部に位置して4ヶ所認められた。P1は径45cm、深さ55cmの円形。P2は45cm、深さ55cmの円形。P3は径50cm、深さ60cmの円形状。P4は径40cm、深さ50cmの円形でほぼ共通した掘り込みをもつ。

竈は、北壁中央部に位置し「U」字状に付設され、焚口から煙道部まで150cm、袖部幅100cm、外部へは半円状に70cm張出す。焚口部は直線的に伸び、火床部は中位に位置し火熱を受け赤褐色で焼き縮まりは強く、煙道部を残す。

覆土は、6層で2・3・4層は灰褐色粘土粒を含み、粘性、縮まりはやや強い。層序はレンズ状の自然埋積。

遺物は、土師器片252（甕228・坏24）須恵器片78（甕35・坏43）が認められた。図示したものは須恵器甕、坏、台坏で底部は回転糸切り、ヘラ切り、ナデ調整などがみられる。竈の隣覆土から出土した10は、刀子の一部で遺存長5.2cm。かなり細く使い込まれている。

本跡は出土遺物から8世紀末の時期が考えられる。



第19図 16号住居跡・出土遺物実測図

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土、色調、焼成	備考
1 須惠質 壺	A	23	器肉は厚く器形から大型の壺か 口縁部外反 口唇部摘み出す	ナデ 横ナデ	雲母・砂少量 錆い黒褐色 普通	10% 覆土
	B					
	C					
2 須恵器 壺	A	14, 7	体部は外反 口唇部は丸く収める	回転ヘラ切り	精選	
	B	4, 7	成形痕は微妙 ナデ	ナデ	灰褐色 良	80% 覆土
	C	7, 2				
3 須恵器 壺	A	13, 5	器肉は薄く体部外反	回転ヘラ切り	雲母・細石多量	
	B	4, 2	口唇部丸く収める成形痕内外 面に頗著に残る体部ヘラ削り	ナデ	灰褐色 良	50% 竈中
	C	7				
4 須恵器 壺	A		底部のみ器肉は7mmとやや厚い	回転糸きり	細石中量	
	B		回転糸きり痕を明瞭に残す	ナデ	灰褐色 良	30% 壁溝
	C	7				
5 須恵器 壺	A	16, 5	体部は強く外反 口縁部は	ナデ	雲母・細石少量	
	B		水平に近い口唇部は丸く収める		淡い灰褐色 良	10% 覆土
	C		成形痕顯著			
6 土師器 壺	A		体部は外反 内面に成形痕顯著	回転ヘラ切り	細石・雲母中良	
	B		底部肥厚 長胴形か	ナデ	黒褐色・内面黄褐色 普通	40% 覆土
	C	6, 8	底部回転ヘラ切り痕			
7 須恵器 高台壺	A		高台は「ハ」の字状やや長め	回転ヘラ切り	細石中量	
	B		器肉は締じて薄い 付け高台	ナデ	青灰褐色 良	30% 覆土
	C	6, 7				
8 土師器 壺	A		弱く外反して立ち上がる	ナデ	細石・雲母多量	
	B		孔部肥厚 長胴形か	ヘラ削り	橙色 良	20% 覆土
	C	10	器腹面凹凸			
9 土製 丸玉	径3, 5×	1/2欠失	孔部磨耗	カット状 指頭押圧	砂やや多量 橙色 良	11g 覆土
	孔径0, 6					

第13表 16号住居跡出土遺物観察表

17号住居跡と出土遺物(第21図・図版5、9)

本跡は調査区西側グリッドE 14区に位置し、西側にゆるく傾斜している。複合関係は無い。プランは東西5.8m、南北約5.3mの方形状を呈し、主軸をN-92°-Eに置く。壁高は東側で20cmとやや高い。

床面は、ゆるく南側に傾斜、2/5程搅乱。一部に白色粘土が認められた。明確な硬化面は無い。壁溝は北、東西に幅15cmから20cmで巡り、掘り込みは10cm前後と深い。これは粘土層のためと思われる。

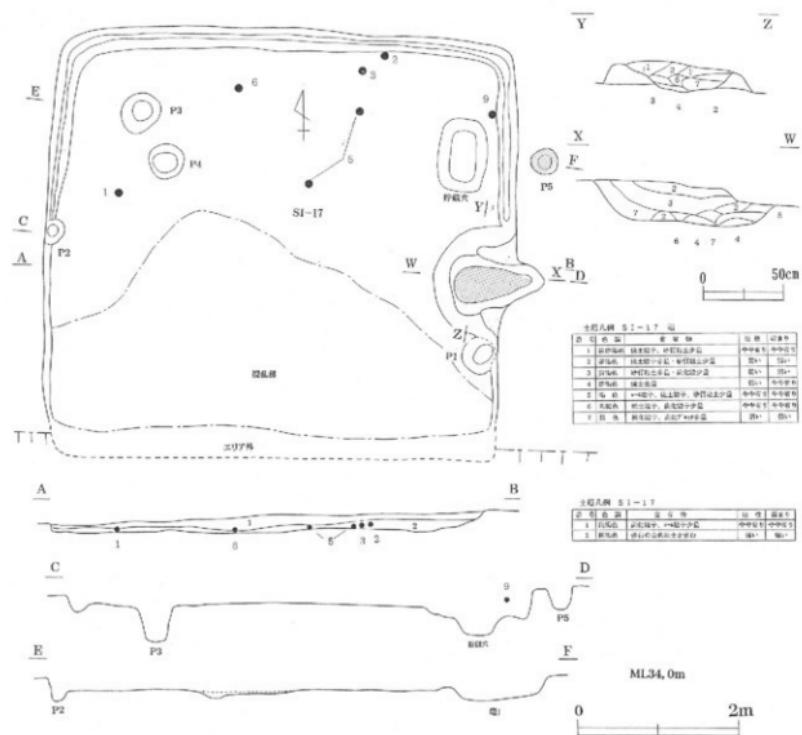
ピットは4ヶ所認められた。P 1は竈右側に位置し径40cm、深さ15cmの円形。P 2は西壁中央に位置し径20cm、深さ15cmの円形。P 3は西隅に位置し径45cm、深さ45cmの円形状。P 4は径40cm、深さ10cmの円形で主柱穴と思われるものはP 3のみ。竈左側には長方形の貯蔵穴がみられ長辺90cm、短辺60cm、深さ40cm。遺構東側にP 5が認められ焼土が充満していた。

竈は、東壁中央部に位置し袖部は短く付設され、焚口から煙道部まで120cm、袖部幅120cm、外部へは「U」状に30cm張出す。焚口部は弱く「ハ」の字状に開く、火床部は奥まで伸び火熱を受け赤褐色で焼き縮まりは強い。

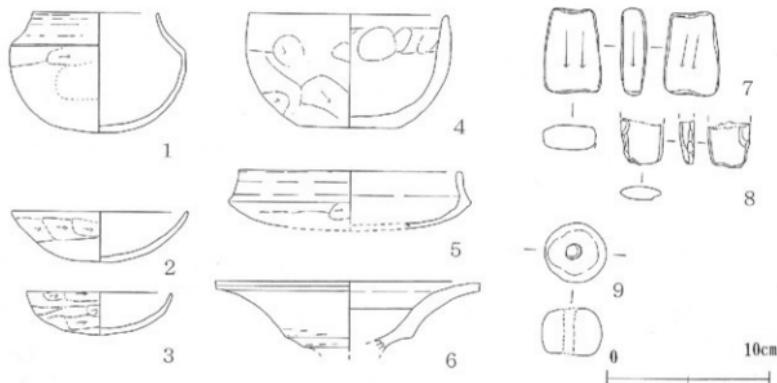
覆土は2層、大半を占める1層は多量の白色粘土粒を含み、粘性、締まりは強い。自然埋積と思われる。

遺物は、土師器片476(甕374・壺102)須恵器片2(甕1・壺1)が認められた。図示したものはすべて土師器で小形の壺と壺と碗、器形は浅く口縁部内傾し、肩部に弱い棱をもつ壺、口縁部が水平にちかく外反する高壺がみられた。

本跡は東側に竈をもつ住居跡で出土遺物も多かった。7世紀初頭の時期が考えられる。



第20図 17号住居跡実測図



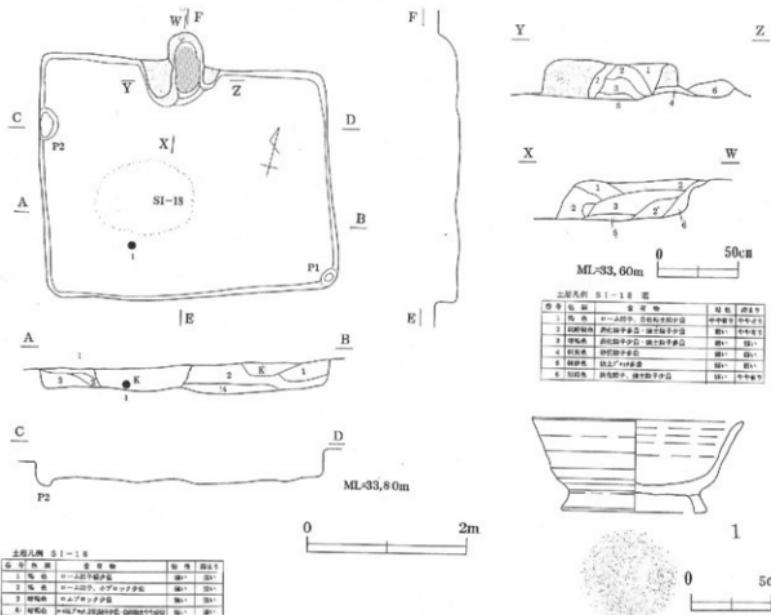
第21図 17号住居跡出土遺物実測図

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
1	土師器 小形壺	A 7,7 B 7,6 C 1	丸底状弱く外反して立ち上がり 肩部で内湾 器肉は3mmと薄い	ヘラ削り 横ナデ・ナデ	細石・砂中量 鈍い黄橙色 普通	95% 床直
		A 10,9 B 3,2 C 1,5	半円状器形 口唇部丸く收める 器肉は4mmでほぼ一定	ヘラ削り ナデ ヘラ磨き	砂・細石中量 鈍い黒褐色 普通	
		A 9 B 2,6 C 2	体部は外反はやや弱い 口唇部は尖り気味 器形から皿より碗に近い	ヘラ削り ナデ	砂・細石中量 鈍い黒褐色 普通	
4	土師器 碗	A 12,3 B 7,1 C 6,2	平底底部は直立口縁部内傾気味 口唇部や尖り気味器肉8mm 前後と厚め やや粗雑	ヘラ削り ナデ指頭調整	砂・細石中量 鈍い黄橙色 普通	40% 撚乱
		A 14 B C	肩部にやや頗るな稜を持つ 口縁部内傾 口唇部は丸く收める 器面粗雑	ヘラ削り 横ナデ・ナデ	砂多量 橙色 普通	
		A 16,5 B C	坏底部を失するが部は強く 外反 弱い稜を残す 器面粗雑	横ナデ・ナデ	砂多量 赤褐色 普通	
7	石器 砥石?	長6,厚1,5 幅3,3	粘板岩 三方に使用痕有り 磨耗進まず 粘板岩?			完 44g
8	石器	長2,6厚0,8 幅2,5	基部欠失 刃部両端剥離面を残す			9g
9	土製 丸玉	径3,7×2,8 孔径0,9	両端カット状 一部磨耗	ナデ調整	砂多量 鈍い橙色 普通	覆土 36g

第14表 17号住居跡出土遺物観察表

18号住居跡と出土遺物(第22図・図版5、6、9)

本跡は調査区西側グリットE16区に位置し、北側にゆるく傾斜している。南側で21号住居跡



第22図 18号住居跡・出土遺物実測図

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土、色調、焼成	備考
1	須恵器 台坏	A 13.2 B 5.6 C 9	脚は短め「ハ」の字状に開く 体部は弱く外反口唇部は開く 内外成形痕	回転糸引き 付け高台	雲母極少量 灰褐色 良	70% 床直

第15表 18号住居跡出土遺物観察表

を掘り込み複合関係にある。プランは東西3.6m、南北2.8mの長方形を呈し主軸をN-9°-Wに置く。壁高は30cmと高い小型の住居跡である。

床面は、東側がやや低く白色粘土は認められたが明確な硬化面は無い。壁溝は確認できなかった。ピットは南東隅部と西壁に位置して2ヶ所認められた。P1は径20cm、深さ15cmの円形。P2は長径3.5cm、深さ10cmの長円形で主柱穴とは考えられなかつた。

竈は、北壁中央部に位置し「U」字状に付設され、焚口から煙道部まで90cm、袖部幅100cm、外部へは「U」字状に30cm張出す。袖部は直線的に伸び、左右で大きさに違いがある。火床部は全面にみられ火熱を受け赤褐色で焼き縮まりはやや強い。

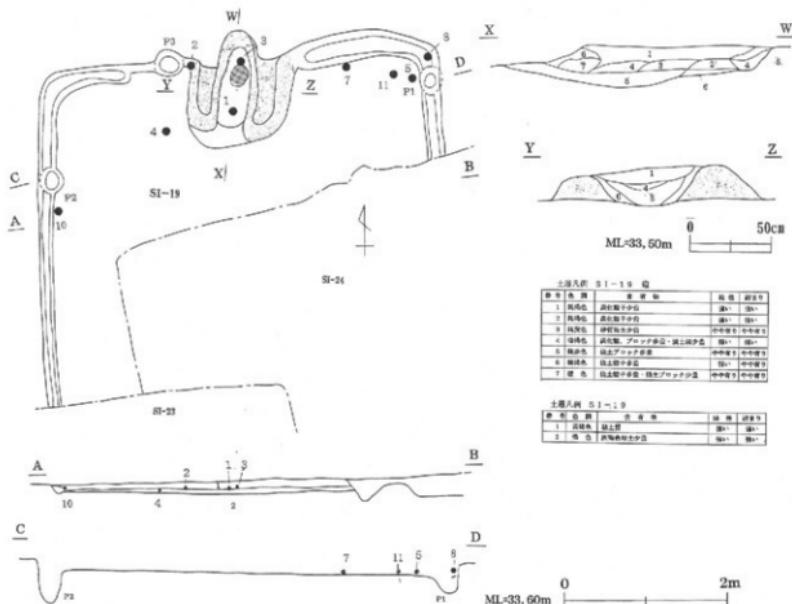
覆土は、4層で中央部に円形状の攪乱が認められた。層序からは人為的な埋積と考えられ白色粘土粒を含む。粘性、縮まりは強い。

遺物は、土師器片86(甕78・坏8) 須恵器片1(坏1)が認められた。図示出来たものは台坏の須恵器のみで少ない。

本跡は出土遺物から8世紀末の時期が考えられる。

19号住居跡と出土遺物(第23図・図版6、9)

本跡は調査区西側グリットE17区に位置し、ほぼ平坦。南側で24・23号住居跡に掘り込まれ



第23図 19号住居跡実測図

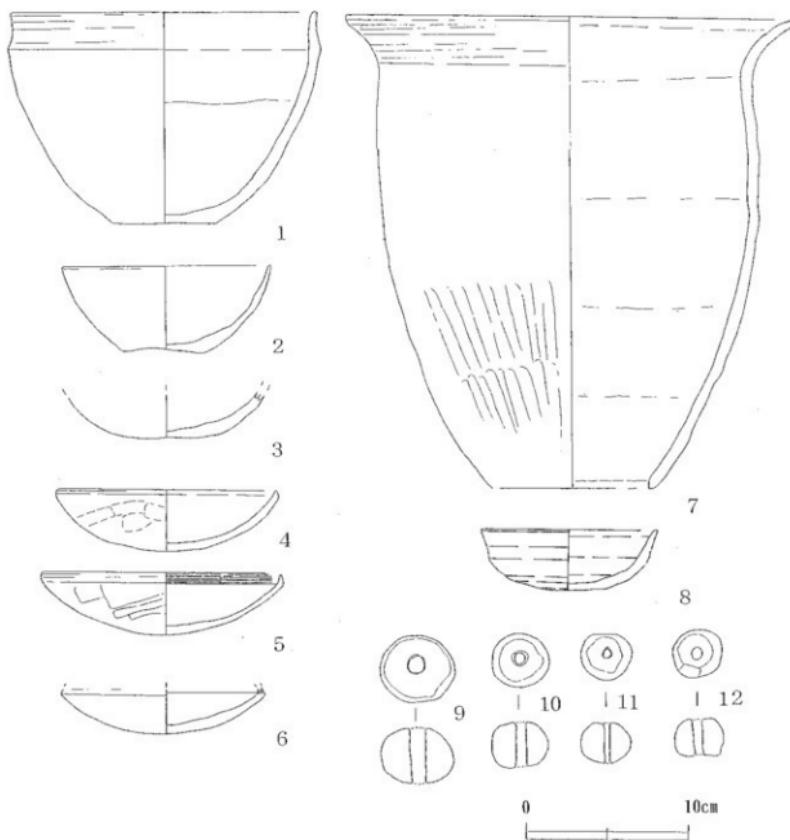
れ複合関係にある。プランは東西5m、南北は掘り込まれて不明。主軸をN-5°-Wに置く。壁高は東側で15cmと浅い。

床面は、ほぼ平坦で竈前面が踏み固められている。壁溝は遺存する西、北、東に幅15cmから25cmでみられた。

ピットは3ヶ所でいずれも壁溝内で認められたが主柱穴とは考えられない。P1は径25cm、深さ15cmの円形。P2は径30cm、深さ40cmの円形。P3は径35cm、深さ15cmの円形。「U」字状掘り込み。

竈は、北壁中央部に位置し「U」字状に細長く付設され、焚口から煙道部130cm、袖部幅130cmで外部へ40cm張り出す。袖部は直線的に伸びる。火床部は奥位に認められ火熱を受け赤褐色で焼き締まりは強い。

覆土は、2層で水平に堆積している。灰褐色の粘土を含み粘性、締まりは強い。



第24図 19号住居跡出土遺物実測図

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土、色調、焼成	備考
1	土師器鉢	A 19	小さな底部から外反して立ち上がる 口縁部直立 口唇部弱く開く 内外剥落多 二次焼成	ナデ	砂中量 鈍い赤褐色 普通	80% 竈中
		B 13				
		C 6.4				
2	土師器碗	A 13	体部内湾気味に立ち上がる 器肉は薄く口唇部尖り気味	ナデ	砂中量 鈍い赤褐色 不良	60% 竈袖
		B 5	内外剥落 多 二次焼成			
		C 5				
3	土師器壺	A				
		B				
		C 5	体部は不安定な底部から開いて 立ち上がる 口縁部欠失 内外剥落 多 二次焼成	ナデ	砂・細石中量 鈍い赤褐色 不良	30% 竈中
4	土師器壺	A 13.7	半球形状 体部は開く 口唇部は短く直立し尖る	ヘラ削り 横ナデ・ナデ	砂少量 黄褐色 良	90% 床直
		B 3.8	内外は一部剥落			
		C 3				
5	土師器壺	A 14.7	半球形状 体部は開く 口唇部は直立し尖る	ヘラ削り 横ナデ・ナデ	砂・スコヤ中量 暗褐色 普通	70% 床直
		B 3.8				
		C 2				
6	土師器壺	A				
		B				
		C 3	半球形状 体部は開く 口唇部は欠失 Na4と同様か 二次焼成	ナデ	砂少量 淡い赤褐色 普通	30% 竈中
7	土師器瓶	A 28	孔部三角形 脊部内湾気味	横ナデ・ナデ	細石中量 鈍い黄褐色 普通	95% 床直
		B 29.3	最大径は脣部上位 口縁部「く」の字状 長胴形	ヘラ削り		
		C 10				
8	須恵器壺	A 3	碗状で端部は開き気味	ナデ	細石・雲母極少量 青灰色 良	70% 覆土
		B 3.7	脣部埋土から出土			
		C 11				
9	土製丸玉	径4.7×3.5	梢円 孔部磨耗 粗雑	ナデ	砂中量 鈍い赤褐色 普	55g 覆土
		孔径1.0				
10	〃	径3.7×2.9	梢円 粗雑	ナデ	砂中量 黄褐色 普	30g 覆土
		孔径0.6				
11	〃	径3.0×2.6	梢円 孔部カット状 不整形	ナデ	砂中量 黄褐色 普	18g 覆土
		孔径0.4	粗雑			
12	〃	径3.0×2.3	両端カット 粗雑	ナデ	砂中量 鈍い黄褐色 普	18g 覆土
		孔径0.6				

第16表 19号住居跡出土遺物観察表

遺物は、土師器片235(甕222・壺13)須恵器片6(甕2・壺4)が認められた。図示したものは須恵器壺1点、壺はいずれも丸底の球形状。口唇部は尖り直立する。鉢は安定した平底、瓶は口縁部は強く外反し長胴形。

本跡は複合関係、出土遺物から7世紀中葉の時期が考えられる。

20号住居跡と出土遺物(第25図・図版6、9)

本跡は調査区西侧グリットE16区に位置し、ほぼ平坦。南側で24号住居跡に掘り込まれ複合関係にある。プランは東西約4.1m、南北約3.8mの方形を呈し、主軸をN-9°-Wに置く。壁高は確認できなかった小型の住居跡である。

床面は、ほぼ平坦で中央部のみ踏み固められている。壁溝は確認できなかった。

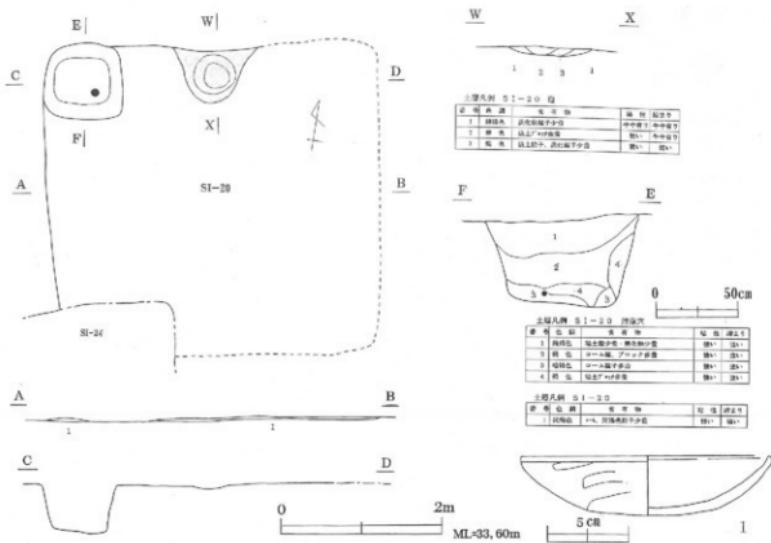
ピットは確認されず竈西側に貯蔵穴がみられた。東西、南北90cmの方形状で110cmと深い。

竈は、北壁中央部に位置し半円状に付設され外部への張り出しは無い。中央に径50cmの円形状の掘り込みに焼土がみられた。上部はすべて欠失しているため明確な形態は不明。円形内が火床部か。赤褐色で焼き締まりは弱い。(上部欠失のためか)

覆土は、1層、5cm以下で鈍い褐色で粘性は弱く、締まりは強い。

遺物は、土師器片27(甕19・壺8)が認められた。須恵器片は無い。図示したものは貯蔵穴内から出土した土師器壺で口唇部は尖り直立する。

本跡は複合関係、出土遺物から7世紀初頭の時期が考えられる。



第25図 20号住居跡・出土遺物実測図

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土、色調、焼成	備考
1 土師器 壺	A B C	15.2 3.7 6	丸底気味で体部は外反して立ち 上がる 口唇部は直立し尖る 一部剥落	ナデ 横ナデ ヘラ削り	細石極少量 暗褐色 良	70% 貯蔵穴

第17表 20号住居跡出土遺物観察表

21号住居跡と出土遺物（第26図・図版6）

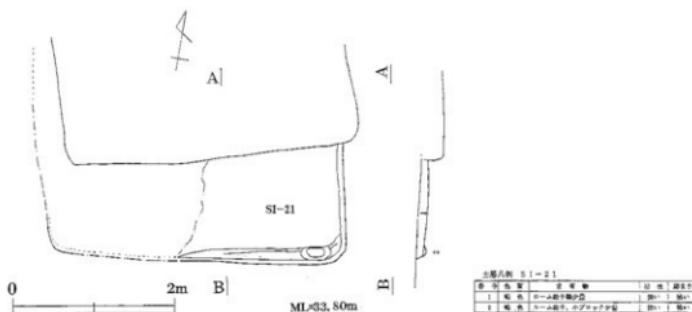
本跡は調査区西側グリットF 16区に位置し、ほぼ平坦。北側で18号住居跡に掘り込まれ複合関係にある。プランは東西3.7m、北側は18号住居跡に掘り込まれ不明。主軸をN-10°-Wに置くと思われる。壁高は10cmと低く、大半は欠失しているが、小型の住居跡と思われる。

床面はゆるく西側に傾斜、半分搅乱され欠失、白色粘土が認められたが明確な硬化面は無い。壁溝は一部認められた。

ピットは隅部に1ヶ所認められ長径40cm、深さ10cmの長円形。

遺物は、土師器片5（甕5）が認められた。須恵器片は無い。図示できる物はなかった。

本跡は出土遺物から7世紀末の時期が考えられる。



第26図 21号住居跡実測図

22号住居跡と出土遺物（第27図・図版6、9）

本跡は調査区西側グリットE 15区に位置し、北側に傾斜している。複合関係は無い。プランは東西2.9m、南北2.8mの方形を呈し、主軸をN-15°-Wに置く。壁高は南側35cm、北側20cmと高い。小型の住居跡である。

床面は、ほぼ平坦。白色粘土は認められたが明確な硬化面は無い。壁溝は幅15cmから25cmで巡り掘り込み5cm前後と浅い。

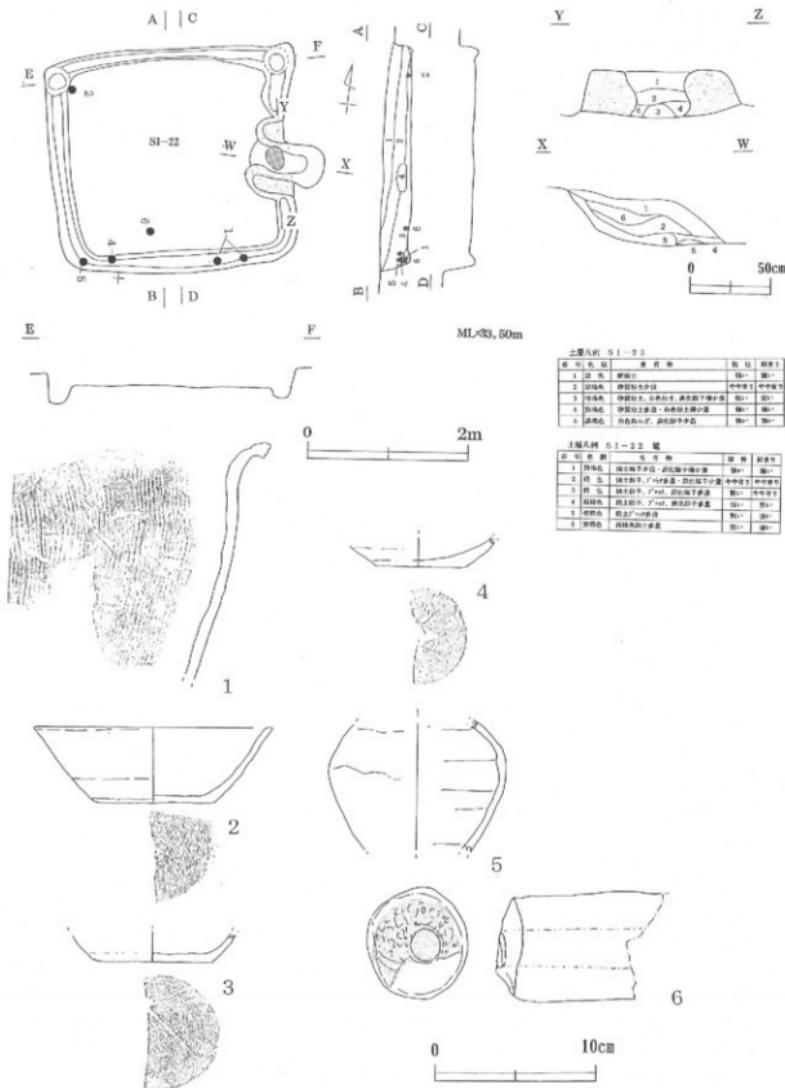
ピットは北側隅壁溝に位置して2ヶ所認められた。P1は径30cm、深さ10cmの円形。P2は径30cm、深さ20cmの円形。掘り込みは「U」字状。

竈は、東壁中央部に位置し「U」字状に付設され、焚口から煙道部まで90cm、袖部幅105cm、外部へは「U」字状に40cm張り出す。袖部はわずかに北側に曲がり付設。火床部は中位に位置し火熱を受け赤褐色で焼き締まりは強い。

覆土は、5層で1・2・5層は黒色、黒褐色。砂質粘土を含み、粘性、締まりは強い。層序は北側に流れるように自然埋積。

遺物は、土師器片87（甕42・壺45）須恵器片26（甕18・壺8）が認められた。図示したものは須恵器甕、壺、底部回転糸切りや灰釉の陶器が1点、また羽口などが出土している。

本跡は出土遺物から9世紀中葉の時期が考えられる。



第27図 22号住居跡・出土遺物実測図

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土、色調、焼成	備考
1 須恵器 甕	A		胴部は外反して立ち上がり頸部は「く」の字状縦位平行タキ目 瓶	タタキ ナデ 内面押圧	雲母極少量 灰褐色 良	10% 覆土
	B					
	C					
2 須恵器 壺	A	14.5	器肉は薄く体部は外反 口唇部は 開き気味に丸く收める	内外面ナデ 回転ヘラ切り	砂・細石中量 黒褐色 良	20% 床直
	B	4.7				
	C	7.3				
3 土師器 壺	A		底部体部とも器肉は4mmと薄い 皿に近い器形か	回転糸引き ナデ	精選 黒褐色 良	20% 竈中
	B					
	C	7				
4 須恵器 壺	A		底部は薄く体部は開き皿に近い 器形	回転ヘラ切り ナデ	細石極少量 灰褐色 良	30% 覆土
	B					
	C	5.3				
5 陶器 小壺	A		最大径を胴部上位に置く 口縁部底部とも欠失 肩部に自然の灰釉	ナデ 内面押圧	精選 緑灰褐色 良	10% 覆土
	B					
	C					
6 羽口	長さ 径 孔	11 6.2 1.9	送風部欠失 孔部にはノロが付着	ナデ	小石少量 孔部黒褐色 錫イ黄褐色	50% 床直

第18表 22号住居跡出土遺物観察表

23号住居跡と出土遺物（第28図・図版6、9）

本跡は調査区西側グリットF18区に位置し、南側にゆるく傾斜している。24・19号住居跡を掘り込み複合関係にある。プランは東西5m、南側は消失し不明。主軸をN-30°-Wに置く。壁高は北側で40cmと高い。

床面は、大半が消失。北、西壁側に一部認められる。壁溝は幅10cmから15cmで巡り掘り込みは、5cm前後と浅いが床面が削平されているため明確ではない。

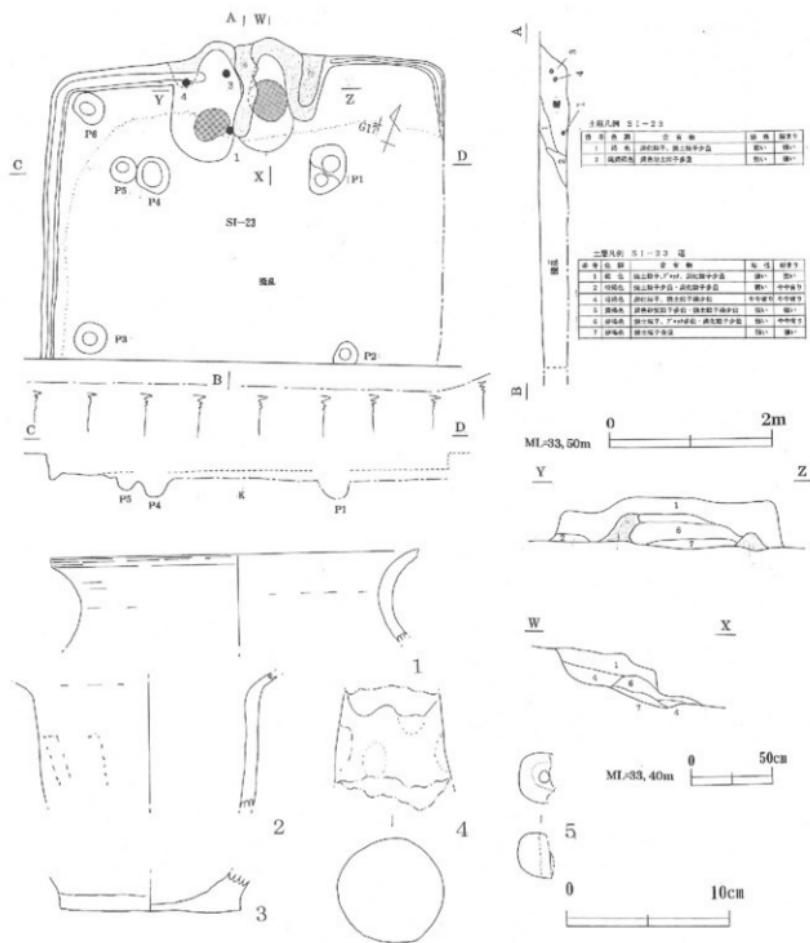
ピットは6ヶ所認められた。主柱穴と思われるP1は径50cm、深さ20cmの梢円形。P2は径30cm、深さ15cmの円形。P3は径40cm、深さ20cmの円形状。P4は径40cm、深さ30cmの円形でいずれも削平され浅い。P5は径30cm、深さ10cmの円形。P6は北西隅部に位置し長径40cm、深さ15cm。

竈は、北壁中央部に位置し隣接して並列して2ヶ所「U」字状に付設され、東側は焚口から煙道部まで110cm、袖部幅110cm、外部へは20cm張り出す。火床部は中位に位置し火熱を受け赤褐色で焼き締まりは強い。西側は焚口から煙道部まで120cm、袖部幅100cm、西袖は短く東側との間の袖は細長く伸びる。火床部は前面に位置し火熱を受け赤褐色で焼き締まりは強い。竈より炉状か。

覆土は、大半が攪乱のため不明。竈部分に2層認められたに過ぎない。

遺物は、土師器片173（甕156・壺17）が認められた。須恵器は無かった。図示したものは土師器甕、支脚の一部。

本跡は複合関係、出土遺物から7世紀末の時期が考えられる。



第28図 23号住居跡・出土遺物実測図

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土、色調、焼成	備考
1 上師器 甕	A	23	頸部「U」の字状 口唇部上方摘出 内面剥落	ナデ	細石多・雲母少量 暗褐色 普通	5% 覆土
	B					
	C					
2 土師器 甕	A		胴頸部のみ「く」の字状 外面剥落 二次焼成	ナデ	精選 赤褐色 良	10% 覆土
	B					
	C					
3 上師器 甕	A		底部のみ 剥落 一次焼成	ナデ	砂中量 黒褐色 普通	10% 竈中
	B					
	C	11, 2				
4 支脚	径 5, 5 遺存長7, 5		上下欠失 円形	ナデ 指頭押え	砂中量 赤褐色	20% 覆土
5 土製 丸玉	径3, 0×2, 8 孔径 0, 7		1/2欠失 稍円形 二次焼成	ナデ	砂中量 黄褐色 普通	覆土 15 g

第19表 23号住居跡出土遺物観察表

24号住居跡と出土遺物（第29図・図版6、9）

本跡は調査区西側グリットF 17区に位置し、南、西側にゆるく傾斜している。東北側で20号住居跡、北側で19号住居跡を掘り込み西側では23号住居跡に掘り込まれ複合関係にある。プランは東西6.1m、南北は不明ながら本遺跡最大の遺構と思われる。主軸をN-20°-Wに置く。壁高は3.5cmと高い。

床面は、ほぼ平坦、南側の一部は搅乱されている。白色粘土が認められたが明確な硬化面は無い。壁溝は幅10cmから15cmで巡り、掘り込みは5cm前後と浅い。

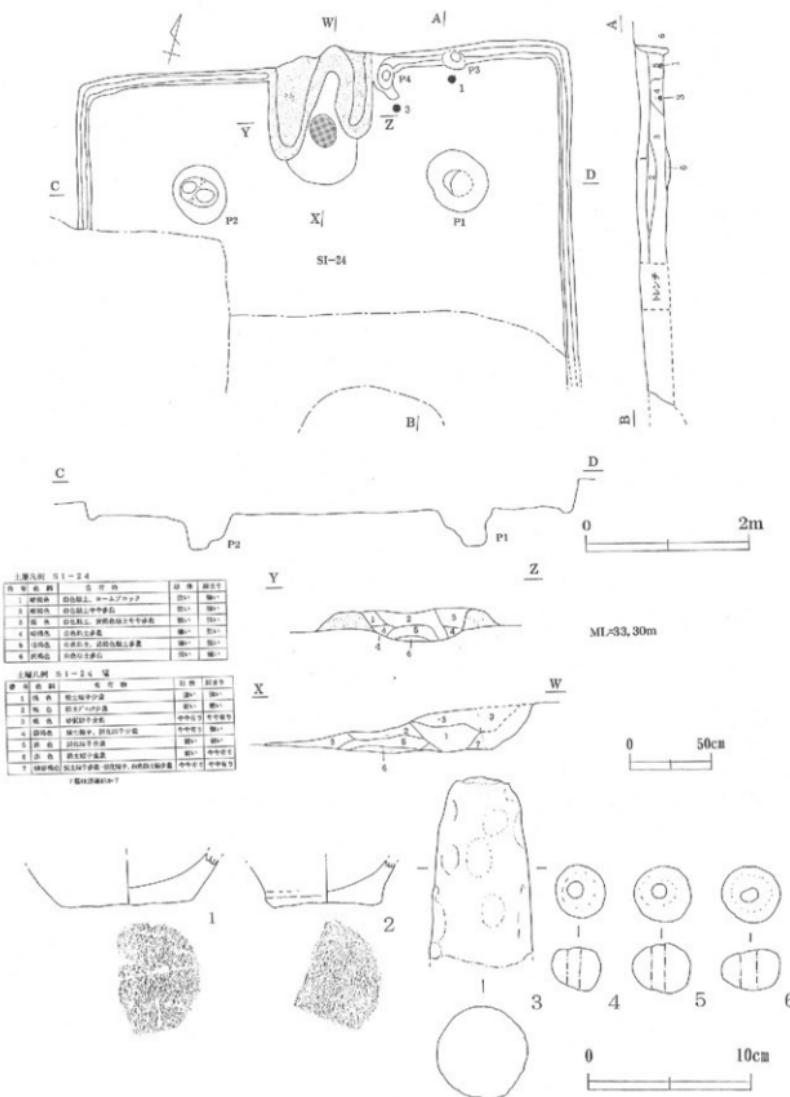
ピットは4ヶ所認められP 1は長径80cm、深さ45cmの楕円形。P 2は径70cm、深さ45cmの円形。「U」字状2段に掘り込みをもち主柱穴と考えられる。P 3は北側壁溝内に位置し径20cm、深さ15cmの円形。P 4は長径30cm、深さ15cm。

竈は、北壁中央部に位置し「U」字状に付設され、焚口から煙道部まで140cm、袖部幅120cm、外部へはわずかに張り出す。焚口部はやや西向きで袖部は直線的に伸びる。火床部は前面に位置し火熱を受け赤褐色で焼き締まりは強い。

覆土は、6層でいずれも白色粘土を含み、粘性、締まりは強い。層序は1層を除き人為的堆積。

遺物は、土師器片258（甕222・壺36）が認められた。須恵器片は無い。図示できるものは少なく土師器甕底部、土製支脚などである。

本跡は複合関係、出土遺物から7世紀中葉から後半の時期が考えられる。



第29図 2.4号住居跡・出土遺物実測図

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土、色調、焼成	備考
1	土師器 甕	A	底部のみ1/2欠失 二次焼成	ナデ	砂多量	5%
		B	平底		赤褐色	
		C 8			やや不良	覆土
2	土師器 甕	A	底部のみ 平底	ナデ	砂中量	5%
		B			外黒褐色・内褐色	
		C 6, 7			普通	覆土
3	支脚	径 5, 7	下部欠失 円形 二次焼成 粗雑	ナデ	砂・長石少量	60%
		遺存長11, 6	剥落	押圧	鋤い橙色 普通	床直
4	上製 丸玉	径3, 2×2, 6	楕円形 磨耗		砂中量	覆土
		孔径 0, 8			黄褐色 普通	23 g
5	〃	径3, 4×2, 8	孔部引き抜き痕 二次焼成 粗雑	ナデ	砂中量	覆土
〃		孔径 0, 8		押圧	暗褐色 普通	29 g
6	〃	径3, 5×2, 5	孔部稍円 卵形 磨耗変形	ナデ	砂中量	覆土
〃		孔径 1, 0			鋤い暗褐色 普通	26 g

第20表 24号住居跡出土遺物観察表

2 土坑

本遺跡から11基の土坑が検出された。遺構は東側と中央部西側に認められた。形は円形状が大半で、掘り込みは浅い。西側の調査区には不整形なものもみられた。

1号土坑と出土遺物（第30図 図版7）

本跡は調査区東側グリットC4区に位置し、東側にゆるく傾斜している。南側の一部は6号住居跡を掘り込み、複合関係にある。プランは円形で径1.25m。底面はほぼ平坦で硬化は弱く壁高は15cmと低い。

覆土は、1層でローム粒子を多量に含む。粘性、締まりは強い。人為的埋積。

遺物は、土師器、須恵器とともに認められなかった。

本跡は複合関係、出土遺物からは時期は把握できなかった。

2号土坑と出土遺物（第30図）

本跡は調査区東側グリットC5区に位置し、1号土坑と隣接。6号住居跡内北側に位置し上部には焼土ブロック、砂質粘土がみられた。残部のプランは長径1.9m、短径1.1mの卵形を呈する。底面はほぼ平坦で硬化はやや弱い。壁高は30cmと高い。

覆土は、5層に分けられた。1層は鋤い赤褐色で焼土ブロック、砂質粘土。2層は砂質粘土、ローム粒子で褐色、3層は砂質粘土が多量で焼土ブロックを含み明褐色。4層は3層に近い。5層はローム粒子を多量に含み明褐色。粘性、締まりは強い。人為的埋積。

遺物は、土師器、須恵器ともに無かった。

本跡は上部の砂質粘土の関係から6号住居跡と時期に大差ないと考えられる。

3号土坑と出土遺物（第30図）

本跡は調査区東側グリットC5区に位置し、2号土坑の南側、6号住居跡内北側竈前に位置。上部には焼土が認められ、プランは長径1.4m、短径1.25m。底面はほぼ平坦で硬化はやや有り壁高は35cmと高い。

覆土は、3層でローム粒子を多量に含む。粘性、締まりは強い。人為的埋積。

遺物は、土師器、須恵器とともに認められなかった。

本跡は上部の砂質粘土の関係から6号住居跡と時期に大差ないと考えられる。

4号土坑と出土遺物（第30図）

本跡は調査区中央南側グリットE 8区に位置し、南側にゆるく傾斜している。北、西側の一部は1号住居跡と3号住居跡を掘り込み複合関係にある。プランは長形で径2.5m、短径1.55m。底面は長円形状の浅い掘り込みが三ヶ所みられ、2ヶ所はピットか。硬化は弱く壁高は15cmと低い。

覆土は、6層で上部は搅乱層。1、2層はピットの可能性有り。3、4、5、6は片側からの人为的埋積。粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器、須恵器とともに認められなかつた。

本跡は覆土の埋積状態などから拔根跡も考えられる。

5号土坑と出土遺物（第30図）

本跡は調査区中央やや西側グリットE 1 2区に位置し、西側にゆるく傾斜している。プランは方形で東西O.8m、南北O.9m。底面には円形状の掘り込みが三ヶ所みられ35cm、30cm、25cm。硬化はやや有り壁高は10cmと低い。

覆土は、5層で焼土ブロック、焼土粒子、炭化粒子を含む。粘性、締まりは弱い。

遺物は、土師器、須恵器とともに認められなかつた。

本跡は覆土の埋積状態から2時期のピットと土坑の可能性が考えられる。

6号土坑と出土遺物（第30図）

本跡は調査区中央西側グリットE 1 1区に位置し、西側にゆるく傾斜している。南側の一部は1号土坑に掘り込まれ、複合関係にある。プランは東西南北O.85mの方形。底面は平坦で白色粘土、壁高は45cmと高い。

覆土は、3層で暗褐色にローム粒、粒子の混入の差で粘性、締まりはやや有る。自然埋積。

遺物は土師器、須恵器とともに認められなかつた。

本跡は、複合関係から9世紀代の時期が考えられる。

7号土坑と出土遺物（第31図 図版7、9）

本跡は調査区西側グリットE 1 7区に位置し、北側にゆるく傾斜している。プランは東西1.4m、南北3mの長円形。底面は平坦で三ヶ所のピット状の掘り込みがある。硬化はやや有り壁高は60cmと高い。

覆土は、黄褐色層を確認の為掘り込んだところ遺物が検出された。よって未作成、断面図のみ。観察では白色粘土に黄褐色粘土が認められた。粘性、締まりはやや強い。

遺物は、土師器片28（壺10・坏18）が認められた。6点ほどは土圧の為破片化し完形品は2点、他はやや散在気味で投げ込み状であった。すべての土器は底部から浮いた状態で検出されている。

本跡の性格は出土遺物の状態から隣接する17号住居跡の貯蔵穴か。7世紀初頭の時期が考えられる。

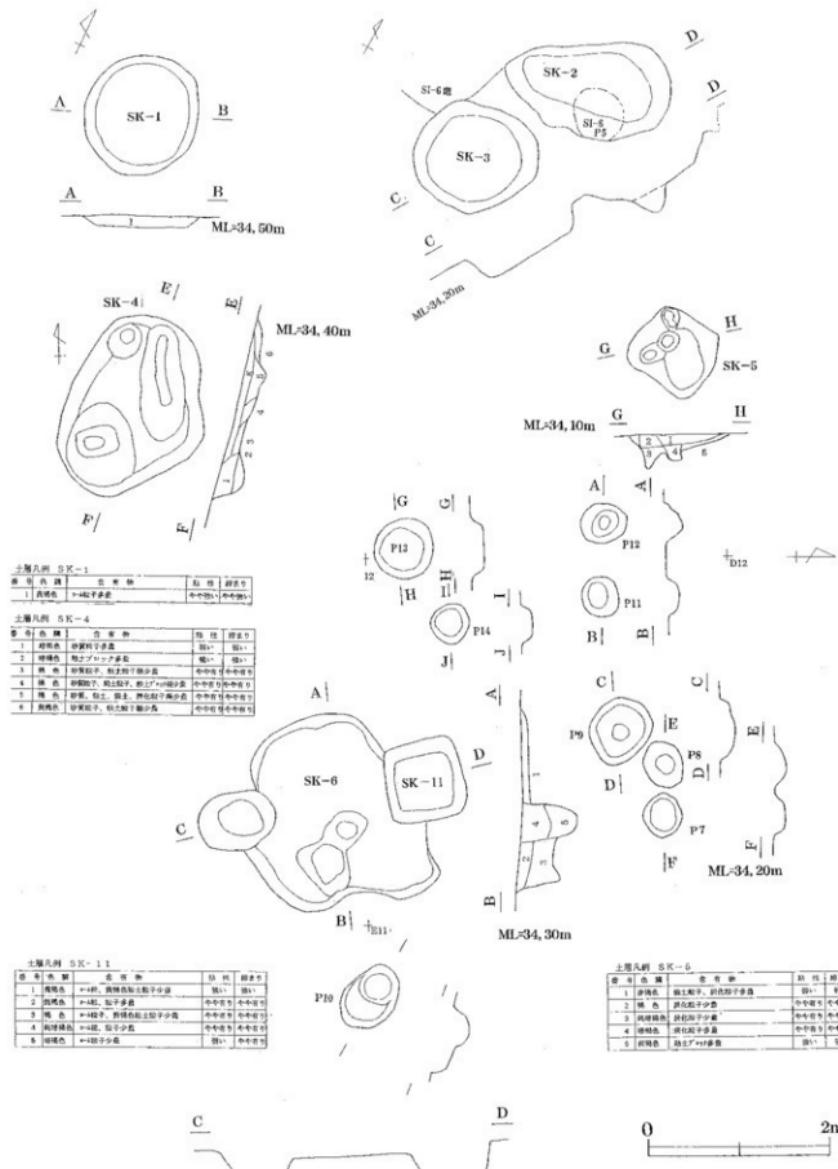
8号土坑と出土遺物（第9図）

本跡は調査区中央東側グリットC 2区、7号住居跡東南隅部に位置し、上部は住居跡で欠失。プランは径1.5mの円形。底面は皿状に中央部がやや深く締まりは弱い。壁高は40cmと高い。

覆土は3層、1層は暗褐色で締まりはやや有る。2層は褐色、3層は明褐色いずれもローム粒、粒子、ブロックの混入の差で締まりはやや弱く自然埋積。

遺物は土師器片5（壺3・坏2）須恵器片1（坏1）弥生式土器壺胴部1片が認められた。

本跡は、複合関係から7世紀代の時期が考えられる。



第30図 1. 2. 3. 4. 5. 6. 11号土坑・7. 8. 9. 10. 11. 12. 13. 14号ピット実測図

番号	器種	法量(cm)	器の特徴及び文様	整形技法	胎土、色調、焼成	備考
1 土師器 壺	A	12, 0	丸底氣味からゆるく立ち上がる 口縁部は内湾 肩部に弱い稜	横ナデ ナデ ヘラ削り	コリ、砂、細石少量 鋤い橙色 普通	
	B	4, 5	口縁部は丸く収める			98% 覆土
	C	5, 0	口唇部は丸く収める			
2 土師器 壺	A	12, 1	丸底氣味からゆるく立ち上がる	横ナデ ナデ ヘラ削り	コリ、砂中量 暗褐色 普通	
	B	4, 3	口縁部は短めに内湾 口唇部は 丸く収める 肩部に弱い稜			95% 覆土
	C	4, 0	丸く収める 肩部に弱い稜			
3 土師器 壺	A	12, 6	丸底氣味からゆるく立ち上がる	横ナデ ナデ ヘラ削り	コリ、砂中量 鋤い黄褐色 普通	
	B	4, 4	口縁部は丸底氣味			80% 覆土
	C	4, 5	口唇部は尖り氣味肩部に弱い稜			
4 土師器 壺	A	14, 0	平底に近くゆるく立ち上がる	横ナデ ナデ ヘラ削り	コリ、砂中量 暗褐色 普通	
	B	4, 5	口縁部は直立 肩部に弱い稜			40% 覆土
	C	6, 0	口唇部は丸く収める			
5 土師器 壺	A	13, 5	丸底氣味からゆるく立ち上がる	横ナデ ナデ ヘラ削り	コリ、砂中量 暗褐色 普通	
	B	4, 0	口縁部は直立氣味			40% 覆土
	C	6, 0	口唇部は尖る 肩部に弱い稜			
6 土師器 壺	A	14, 0	丸底氣味からゆるく立ち上がる	横ナデ ナデ ヘラ削り	コリ、砂中量 鋤い黄褐色 普通	
	B	4, 9	口縁部は直立 肩部に弱い稜			80% 覆土
	C	5, 0	口唇部は丸く収める			
7 土師器 壺	A	14, 5	やや大形体部はゆるく立ち上がる	横ナデ ナデ ヘラ削り	コリ、砂少 鋤い黄褐色 普通	
	B	4, 5	口縁部は直立 肩部に弱い稜			完形 覆土
	C	5, 0	口唇部は内側にカット状			
8 土師器 壺	A	17, 5	体部は内湾して立ち上がる	横ナデ ナデ ヘラ削り	コリ、砂少 淡い赤褐色二次焼成 普通	
	B		口縁部は短く内湾			40%
	C		口唇部は内側にカット状			覆土

第21表 7号土坑出土遺物観察表

9号土坑と出土遺物（第31図）

本跡は、西側に新たに設定した馬の背状の調査区から検出された。地形は西側に傾斜している。プランは東西1.85m、南北1mの長円形。底面は西側に傾斜、砂質の為硬化は無く壁高は5cmと低い。

覆土は、暗褐色層で砂粒を多量に含む。粘性、締まりは無い。自然埋積か。

遺物は、土師器片16（甕15・壺1）が認められた。いずれも小片で図示できるものは無かつた。壺の把手の一部が見られた。

本跡は出土遺物から8世紀から9世紀の時期が考えられる。

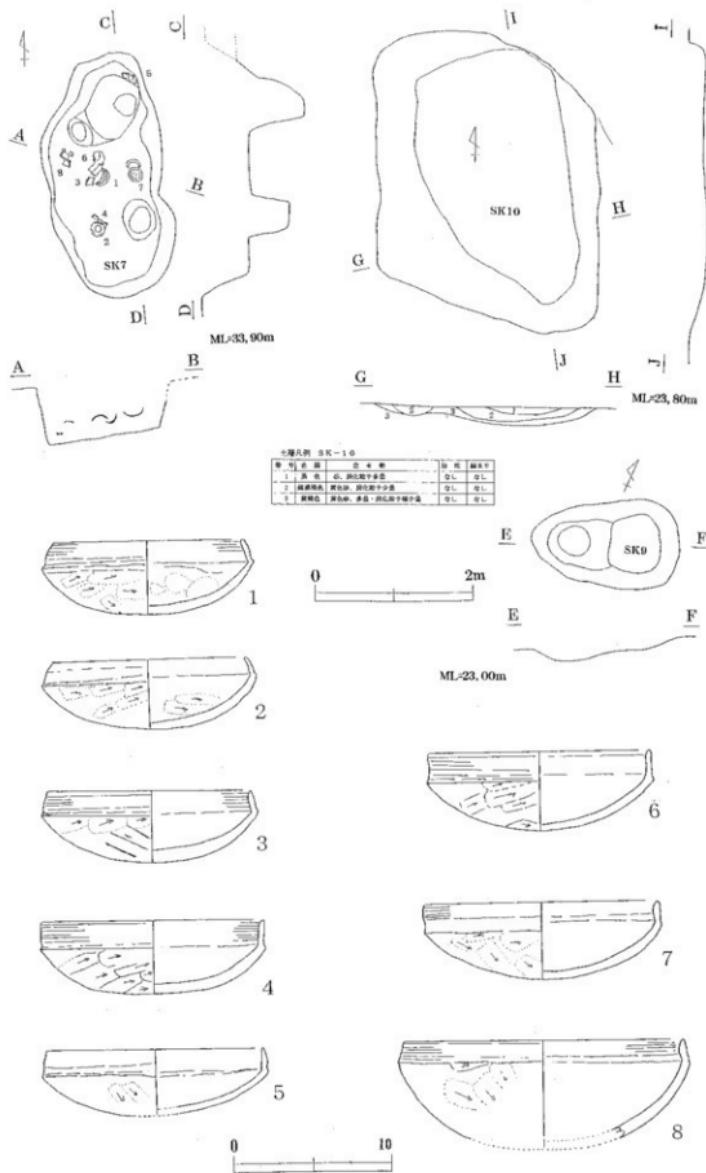
10号土坑と出土遺物（第31図 図版7）

本跡は西側に新たに設定した調査区西端から検出された。地形はゆるく北側に傾斜している。プランは東西2.8m、南北3.5mの長方形状。底面はほぼ平坦で硬化は無く壁高は15cmと低い。

覆土は、3層で1層には炭化粒子を多量に含む。底面の3層は黄褐色砂を多量に含み粘性、締まりは無い。層序はレンズ状を示し自然埋積。

遺物は、土師器片34（甕28・壺6）が認められた。いずれも小片で図示できるものは無かつた。

本跡は出土遺物から7世紀初頭から7世紀中葉の時期が考えられる。



第31図 7. 9. 10号土坑実測図・7号土坑出土遺物実測図

11号土坑と出土遺物（第30図）

本跡は調査区中央西寄りグリットF11区に位置し、南側にゆるく傾斜している。北側は6号土坑を掘り込み複合関係にある。プランは東西南北85cmの方形状。底面は平坦で硬化はやや有る。壁高は45cmと高い。

覆土は、3層で黄褐色。粘性、締まりはやや有る。

遺物は土師器が1片認められた。

本跡は、複合関係から7世紀から8世紀の時期が考えられる。

3 ピット

ピットは24基検出された。大半は中央西側に集中して認められた。いずれも径20cm、深さも15~25cm前後のものが大半であったが60cmの深いものも見られた。7号から19号、20号から25号は柵列状の直線を呈するが明瞭なプランは不明。その他土坑状の大型のものもあった。遺物は少なく時期を特定できなかった。総じて柵列状の位置関係と思われる。

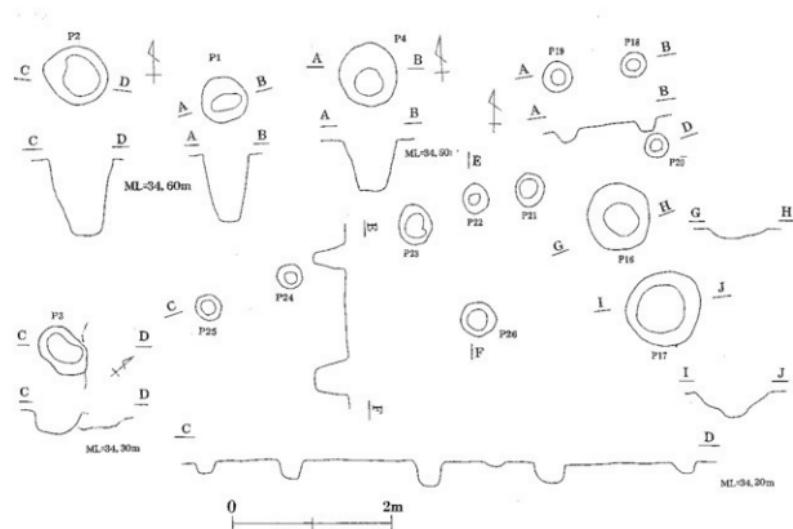
1号ピット（第33図）

調査区中央部東側グリットC5区に位置し、北側にゆるく傾斜している。複合関係は無い。プランは径55cmの楕円形で「U」字状に80cmほど掘り込む。

覆土は、3層で1層は鈍い褐色。2層は明褐色。3層は明褐色。1層を除きローム粒、粒子を大量に含む。粘性、締まりは強い。

遺物は、土師器片3（甌2・壺1）須恵器片1（壺1）が認められた。いずれも小片で図示できるものは無かつた。

出土遺物から7世紀から8世紀の時期が考えられる。



第32図 1. 2. 3. 4. 16. 17. 18. 19. 20. 21. 22. 23. 24. 25. 26号ピット実測図

2号ピット（第33図）

調査区中央東側グリットC6区に位置し、北側にゆるく傾斜している。複合関係は無い。プランは長径80cm、短径70cmの梢円形で「U」字状に9.5cm掘り込む。

覆土は、4層で1層は鈍い褐色。2層は褐色。3、4層は明褐色。1層に少量の焼土粒子を含む。他是ローム粒子の混入の差で粘性、締まりは強い。

遺物は、土師器片2（甕2）が認められた。いずれも小片で図示できるものは無かった。

隣接するP1と何らかの関係があると思われる。出土遺物から7世紀から8世紀の時期が考えられる。

3号ピット（第33図）

調査区中央東側グリットC5区に位置し、北側にゆるく傾斜している。1号溝を掘り込み複合関係にある。プランは長径70cm、短径45cmの長円形で「U」字状に2.5cm掘り込む。単独。

覆土は、2層で1層は淡い赤褐色で焼土粒子を中量。2層は褐色で焼土粒子少量とローム粒子多量。粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器、須恵器とも認められなかった。

複合する1号溝を掘り込むことから7世紀から9世紀の時期が考えられる。

4号ピット（第33図）

調査区中央東側グリットC9区に位置し、西側にゆるく傾斜している。複合関係は無い。プランは径80cmの円形状で「U」字状に60cm掘り込む。

覆土は、3層で1層は褐色でローム粒子中量。2、3層は明褐色でローム粒子、白色粘土を極少量含む。粘性、締まりは強い。

遺物は土師器、須恵器とも認められなかった。時期は不明。

7号ピット（第33図）

調査区西寄りグリットE11区に位置し、西側にゆるく傾斜している。複合関係は無い。プランは径45cmの円形状で鍋底状に10cm掘り込む。

覆土は、上部が褐色でローム粒子を少量含み粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器片1（甕1）が認められ、小片で図示できるものでは無かった。

出土遺物から8世紀から10世紀で西側に連なるピット群の1つと考えられる。

8号ピット（第33図）

調査区西寄りグリットE11区7号ピットに隣接し、西側にゆるく傾斜している。複合関係は無い。プランは径55cmの梢円形で鍋底状に10cm掘り込む。

覆土は、上部が褐色でローム粒子を少量含み粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器片4（甕4）が認められ、いずれも小片で図示できるものは無かった。

出土遺物から8世紀から10世紀で西側に連なるピット群の1つと考えられる。

9号ピット（第33図）

調査区西寄りグリットE11区に位置し、西側にゆるく傾斜している。複合関係は無い。プランは径40cmの円形状で鍋底状に15cm掘り込む。

覆土は、上部が褐色でローム粒子を少量含み粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器、須恵器片とも認められなかった。

時期は不明だが西側に連なるピット群の1つと考えられる。

10号ピット（第33図）

調査区中央西寄りグリットF 10区に位置し、南側にゆるく傾斜している。複合関係は無い。プランは長径80cm短径50cmの楕円形状で掘り込みは2段になり15cm、25cmの鍋底状。2基の複合か。

覆土は、上部が褐色でローム粒子を少量含み粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器、須恵器片とも認められなかった。

時期は不明だが西側に連なるピット群の1つと考えられる。

11号ピット（第33図）

調査区西寄りグリットE 11区に位置し、南側にゆるく傾斜している。複合関係は無い。プランは径45cmの楕円形状で鍋底状に15cm掘り込む。

覆土は、上部が褐色でローム粒子を少量含み粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器、須恵器片とも認められなかった。

時期は不明だが西側に連なるピット群の1つと考えられる。

12号ピット（第33図）

調査区西寄りグリットE 12区に位置し、西側にゆるく傾斜している。複合関係は無い。プランは径50cmの円形状で開いた「U」字状に20cm掘り込む。

覆土は、上部が褐色でローム粒子を少量含み粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器、須恵器片とも認められなかった。

時期は不明だが西側に連なるピット群の1つと考えられる。

13号ピット（第33図）

調査区西寄りグリットE 12区に位置し、西側にゆるく傾斜している。複合関係は無い。プランは径65cmの円形状で鍋底状に15cm掘り込む。

覆土は、上部が褐色でローム粒子を少量含み粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器、須恵器片とも認められなかった。

時期は不明だが西側に連なるピット群の1つと考えられる。

14号ピット（第33図）

調査区西寄りグリットE 11区に位置し、西側にゆるく傾斜している。複合関係は無い。プランは径45cmの円形状で鍋底状に10cm掘り込む。

覆土は、上部が褐色でローム粒子を少量含み粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器、須恵器片とも認められなかった。

時期は不明だが西側に連なるピット群の1つと考えられる。

16号ピット（第32図 図版7）

調査区西寄りグリットE 12区に位置し、西側にゆるく傾斜している。複合関係は無い。プランは径85cmの円形状で鍋底状に15cm掘り込む。

覆土は、上部が褐色でローム粒子を少量含み粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器、須恵器片とも認められなかった。

時期は不明だが西側に連なるピット群の1つと考えられる。

17号ピット（第32図 図版7）

調査区西寄りグリットF12区に位置し、南側にゆるく傾斜している。複合関係は無い。プランは径9.5cmの円形状で鍋底状に30cm掘り込みや大型で深い。

覆土は、上部が褐色でローム粒子を少量含み粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器片7（壺5・坏2）須恵器片1（坏1）が認められ、いずれも小片で図示できるものは無かつた。

出土遺物から8世紀から10世紀の時期が考えられる。

18号ピット（第32図 図版7）

調査区西寄りグリットE12区に位置し、西側にゆるく傾斜している。複合関係は無い。プランは径3.5cmの円形状で台形状に15cm掘り込む。

覆土は、上部が褐色でローム粒子を少量含み粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器片1（壺1）が認められ、小片で図示できるものでは無かつた。

出土遺物から8世紀から10世紀の時期が考えられる。

19号ピット（第32図 図版7）

調査区西寄りグリットE12区に位置し、西側にゆるく傾斜している。複合関係は無い。プランは径4.0cmの円形で「U」字状に15cm掘り込む。

覆土は、上部が褐色でローム粒子を少量含み粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器、須恵器片とも認められなかつた。

時期は不明だが西側に連なるピット群の1つと考えられる。

20号ピット（第32図 図版7）

調査区西寄りグリットE13区に位置し、西側にゆるく傾斜している。複合関係は無い。プランは径3.0cmの円形で鍋底状に15cm掘り込む。

覆土は、上部が褐色でローム粒子を少量含み粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器片7（壺5・坏2）須恵器片1（坏1）が認められ、いずれも小片で図示できるものは無かつた。

出土遺物から9世紀から10世紀の時期が考えられる。

21号ピット（第32図 図版7）

調査区西寄りグリットE13区に位置し、西側にゆるく傾斜している。複合関係は無い。プランは径3.5cmの円形状で鍋底状に20cm掘り込む。

覆土は、上部が褐色でローム粒子を少量含み粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器、須恵器片とも認められなかつた。

時期は不明だが西側に連なるピット群の1つと考えられる。

22号ピット（第32図 図版7）

調査区西寄りグリットE13区に位置し、西側にゆるく傾斜している。複合関係は無い。プランは径3.0cmの円形状で「U」字状に40cm掘り込む。深い。

覆土は、上部が褐色でローム粒子を少量含み粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器、須恵器片とも認められなかつた。

時期は不明だが西側に連なるピット群の1つと考えられる。

23号ピット（第32図 国版7）

調査区西寄りグリットE13区に位置し、西側にゆるく傾斜している。複合関係は無い。プランは径50cmの長円形状で「U」字状に30cm掘り込む。

覆土は、上部が褐色でローム粒子を少量、下部は白色粘土粒を少量含み粘性、締まりはやや有る。遺物は、土師器、須恵器片とも認められなかった。

時期は不明だが西側に連なるピット群の1つと考えられる。

24号ピット（第32図 国版7）

調査区西寄りグリットF13区に位置し、西側にゆるく傾斜している。複合関係は無い。プランは径30cmの円形状で「U」字状に20cm掘り込む。

覆土は、上部が褐色でローム粒子を少量含み粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器、須恵器片とも認められなかった。

時期は不明だが西側に連なるピット群の1つと考えられる。

25号ピット（第32図 国版7）

調査区西寄りグリットF13区に位置し、西側にゆるく傾斜している。複合関係は無い。プランは径30cmの円形で鍋底状に15cm掘り込む。

覆土は、上部が褐色でローム粒子を少量含み粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器、須恵器片とも認められなかった。

時期は不明だが東側に連なるピット群の1つと考えられる。

26号ピット（第32図 国版7）

調査区西寄りグリットF13区に位置し、西側にゆるく傾斜している。複合関係は無い。プランは径45cmの円形で「U」字状に40cm掘り込む。深い。

覆土は、上部が褐色でローム粒子を少量含み粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器、須恵器片とも認められなかった。

時期は不明だが北側に連なるピット群の1つと考えられる。

27号ピット（第32図）

調査区西寄りグリットF11区に位置し、南側にゆるく傾斜している。11号土坑と複合関係に有る。プランは長径85cm、短径65cmの長円形状で小規模な土坑状で35cm掘り込む。

覆土は、上部が褐色でローム粒子を少量含み粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器、須恵器片とも認められなかった。

複合関係から8世紀から10世紀の時期が考えられる。

4 溝

溝は2条認められた。1号溝は調査区の東側に位置、2号溝は西側の調査区から検出された。いずれも短く浅い。

1号溝と出土遺物（第33図）

本溝は、調査区東側グリットC2区に位置し、地形的には東側にゆるく傾斜を示す。東側の一部は5号住居跡に掘り込まれ複合関係にある。東西に長さ4.5m、幅は東側で170cm、西側に向かつて幅は次第に狭くなり中ほどで110cm、最後は円形状に収まる。底面は東側にゆるく傾斜、中央部

が僅かに低い。硬化は弱くローム面剥き出し状、壁高は10~15cmと低い。先端部にピットが見られたが覆土から、本遺構とは直接関係ない。

覆土は、2層でローム小ブロックと粒子を多量に含む。粘性、締まりはやや強い。自然埋積。

遺物は、土師器片（甕・壺）が認められた。須恵器片は認められなかった。いずれも小片で図示できるものは無かった。

本跡は複合関係と出土遺物から8世紀前半の時期が考えられる。

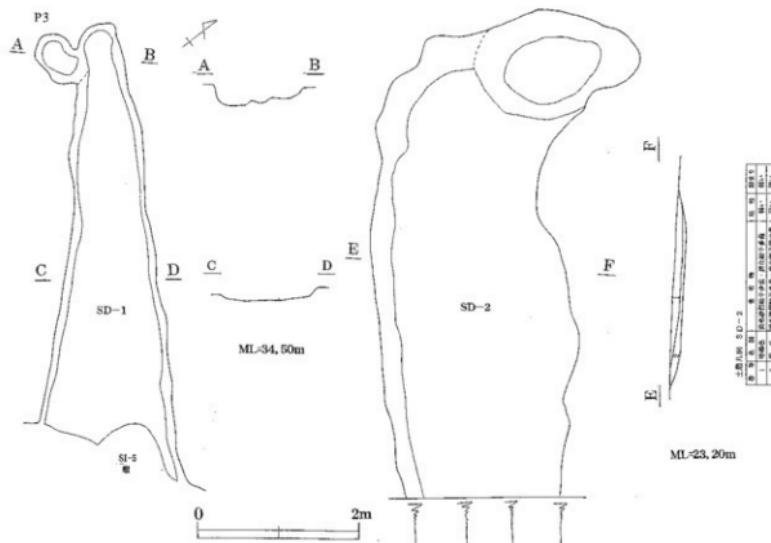
2号溝と出土遺物（第33図 図版7）

本溝は新たな調査区、西側の中央部に位置し、馬背状台地を切断するように南北に見られたが、掘り込みは浅く皿状を呈する。ゆるく南側に傾斜している。長さ6m、幅は2m~2.5m北側に浅い掘り込みが認められ、南側に緩く傾斜を示す。複合関係はない。底面は粗い砂層で硬化は面は無く西側でも壁高は5cmと低い。

覆土は、2層で黄褐色の砂層で粘性、締まりは弱く、自然埋積。

遺物は、土師器片56（甕45・壺11）が認められた。須恵器片は認められなかった。出土した土器は角が取れて磨り減り、いずれも小片で図示できるものは無かった。

本跡は出土遺物から7世紀から8世紀頃の時期が考えられる。



第33図 3号ピット・1、2号溝実測図

5 炭窯

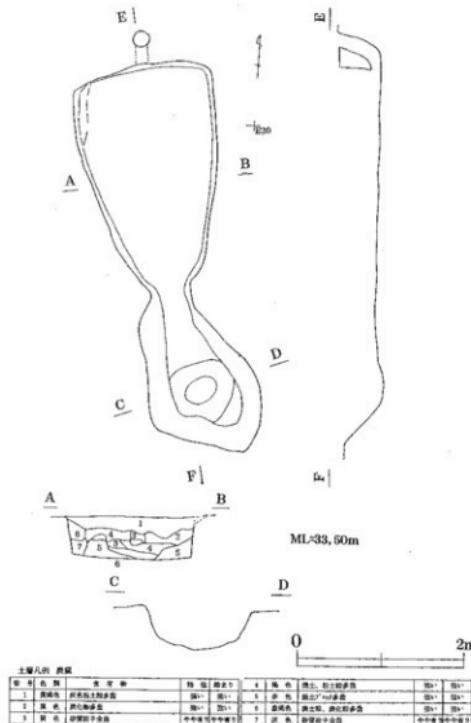
1号炭窯と出土遺物（第34図 図版7、9）

本跡は調査区西側端部、グリットはF20区に位置し、南、西側にゆるく傾斜している。炭窯は南北方向に構築され、南側が焚口になっていた。本体部は長さ2.7m、幅は北側で1.6mの焚口部で60cmと狭く、徳利状を呈する。天井部は欠失、土層から崩落痕は認められなかった。焚口は幅50cmと狭く、煙道部は円形で径20cm。掘り込みは50cm。底部は平坦で硬化、真黒で光沢を持つ。複合関係はない。

覆土は、7層で焼土ブロック、粒子、炭化物、粒を多量に含む。粘性、締まりは弱い。天井部と思われる煉瓦状のものは認められず、上部を覆う1層は周辺の灰褐色粘土層で人為的な埋積。下層の2~7層は周辺の残土、焼土、ブロック、炭化物、粒、砂質粘土が不規則に混在していた。

遺物は、破片14（甕4）ホイロ・土管・土鍋・笠間焼甕・平瓦など戦前、戦後に使用された物が見られた。（写真図版9）

本跡は出土遺物から昭和20年前後の時期が考えられる。



第34図 1号炭窯実測図

IV 結びにかえて

本遺跡は前述の通り確認調査により新たに発見されたものであり、このため遺跡の性格、時期等は全く不明であった。本調査も確認トレンチの層序にしたがって表土層を取り除き、遺構確認作業を行ない時代と時期、プランや軒数が確認された。遺構の大半は馬背状台地が弱く「く」の字状にふくらむ部分で約800mの狭い範囲に検出された。

調査によって24軒の竪穴住居跡、土坑1基、溝2条、ピット26基が出土した。各遺構のプランや竈の付設状態、柱穴、出土遺物などの特徴から、これら住居跡の営まれた時代は古墳時代から平安時代、7世紀初頭から10世紀末期のおよそ400年間が考えられる。各遺構とも上部の堆積土は10cm前後と浅く、各遺構の掘り込みも10cm前後で最大でも50cmであった。柱穴が確認できない遺構、出土遺物も少ないため時期の判断には慎重を要するが、住居跡プランや土器、竈等から住居跡の変遷について述べて結びとしたい。

住居跡の変遷と出土遺物

本遺跡からは少量の绳文時代前期の浮島式と弥生時代後半の十王台式土器の細片が20点ほど出土しているが、これに伴う遺構は認められなかった。

土坑、溝、ピットでは7号土坑以外明確に時期を特定できる遺構はなく、出土遺物やプラン等から住居跡の年代に伴うものと推察される。その外近代の炭窯が1基認められた。

古墳時代鬼高Ⅲ期前半に該当する住居跡は17、20号でプランは方形状、17号は東側に竈をもち、「U」字状で20号は大半が欠失、竈の火床部と貯蔵穴が確認され全体像は不明に近い。出土遺物では环球形土器は須恵器の影響化のものに見られる肩部に弱い稜を持ち口縁部は内傾、直立するものと半球形状の体部と口唇部が短く直立し尖る形態が認められる。17号は碗形土器、壺形土器などの出土も見られ、遺物の特徴から本遺跡初頭の遺構である。土坑では7号が出土した壺の特徴から同期のものと考えられる。

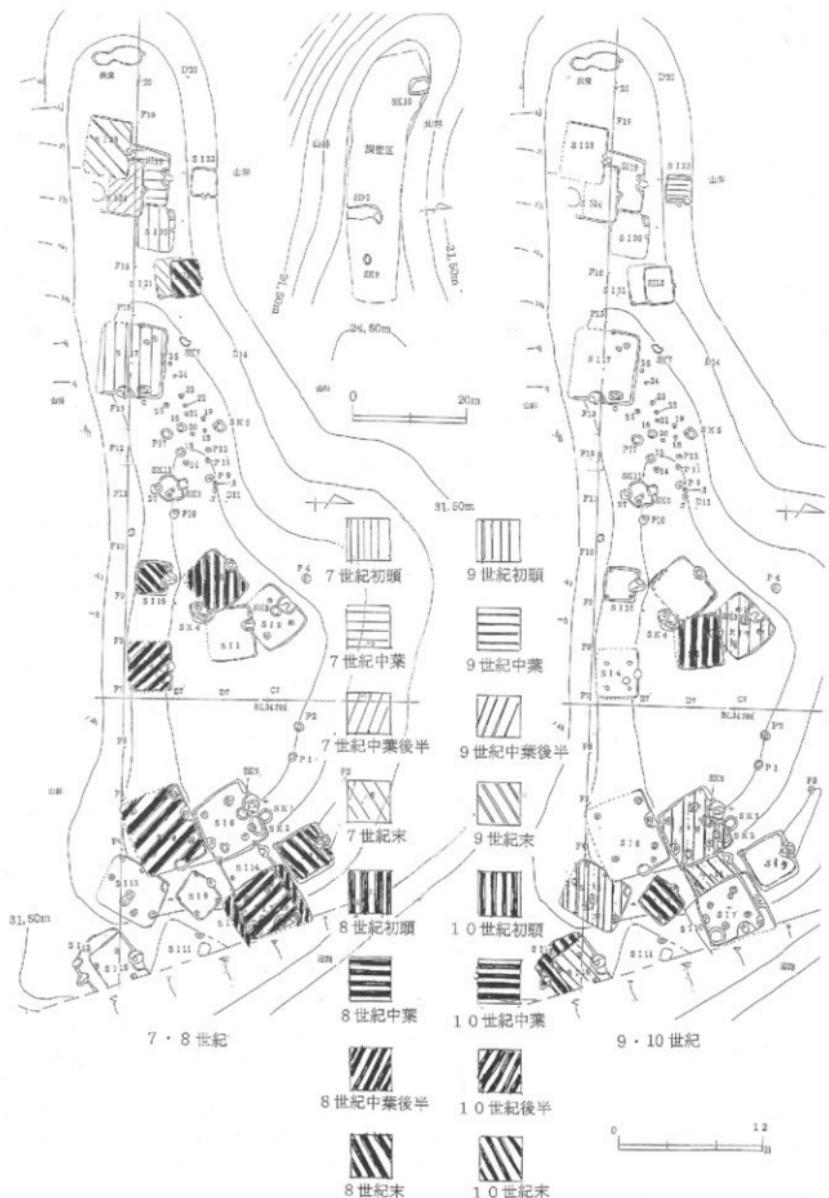
古墳時代鬼高Ⅲ期後半に位置付けられるものは10、19号住居跡でプランは複合し不明に近いがやや大形、方形状と推察され共に北側に竈を持つが10号では円形で炉状であるが、袖部は砂質粘土を用いる。(上部欠失の為か)23号住居跡では「U」字状で長目の袖が付設されている。19号住居跡は床面から出土した長胴形であるが胴部の最大径は上位に置く竈、竈周辺出土の壺などから考えられる。古式の須恵器壺が見られた。10号では内部にヘラ磨きを持つ碗形土器、摘みが扁平な蓋が見られないが土師器。21号も同様か。

真間期Ⅰ期には3、12、24号が推察される。プランは方形状やや小型、壁高は浅い。遺物もなく断定は出来ない。

真間期Ⅱ期に位置付けられるものは8、24号住居跡。プランは方形状、本遺跡では大形の部類に入る。24号は南側に粘土探掘の穴があり傾斜面との関係で全掘出来ず一部不明。竈は北壁に付設し「U」字状の袖を持つ24号と炉状の竈を持つ8号がある。24号は外部に「U」字状に張り出す。8号は壁高が皆無に近く確認面が床面であり遺存状態は悪い。焚口部に砂質粘土を持ち竈より炉状の感じを受けるが上部欠失の為不明。類例は以降の住居跡に見られる。主軸は西側に寄る。

遺物は少なく24号からは瓈形土器底部、土製支脚、8号では石製の紡錘車が出土している。

真間期Ⅲ期前半に位置付けられるものは2、4、7号住居跡でプランは方形状7号のみ壁高は40cm前後と深い。2、4号は浅く確認面で床面の一部が認められた。柱穴が認められている。竈は砂質粘土で焚口部を高くし炉状の感じの2号、東側に付設し住居跡内部に付設し深く掘り込む7号、浅く僅かに砂質粘土を認める4号。須恵器壺の特徴は、7号では体部の器内は厚め、2号では薄く開き底部には回転ヘラ切り痕を残す。瓈形土器口唇部は上方へ摘み出し、長胴形。主脚は細く貧弱。



第35図 住居跡変遷図

真間Ⅲ期後半の位置付けられる1、6、18号住居跡ともプランは方形状でやや北寄りに主軸を置く。6は壁高20cm程を測るが1は南側では欠失、北側では10cm前後と低い。6号では柱穴を認め、竈は「U」字状に袖を付設。遺物は2号から口唇部を長く摘み出す小型甕、体部が強く外反する須恵器坏が見られる。1号からは土製の紡錘車、18号では高台の短い环も見られこれはやや古手が出土している。

真間Ⅲ期末に位置付けられる5、16号住居跡は、一辺3~4mの小型のプランで掘り込みは20cm~50cmと壁高は高く前述の1、6号より主軸は北に寄り、16号はほぼ北。床面はいずれも粘土層になり明確な硬化面は認められなかった。5号から叩き目を持つ甕、底部ヘラ削りの坏が見られたが竈の補強材として使用されていた。16号では四隅に柱穴が見られ、竈の煙道部を残す遺存状態の良い遺構であった。遺物は、底部ヘラ切り、体部の器肉の薄い須恵器坏と高台付の皿?が見られ、大型の甕形土器口線部が出土している。

国分Ⅰ期に位置付けられる13、14号住居跡は、小型で方形プラン、主軸は西寄り、竈は北壁側と東南側と反対側に付設し小型化している。遺物は土師器が大半、底部に回転糸切り痕、台坏と共に出土している共通性がある。14号からは内面黒色にヘラ磨きの皿と三角形状の甕と思われる須恵質土器が見られた。

国分Ⅱ期、本遺跡の終末期のものは13、22号住居跡が考えられる。これは西と東に分かれているが13号は東南側に竈を付設、大半は地床炉的であった。遺構は不正形、道路により削平されプランは不明瞭。22号は西側、北の斜面部直近に位置し、ゆるく傾斜する変則的な場所に見られ、床面は粘土質であり東側に竈を付設する小型の住居跡である。遺物は、13号では土師器碗形土器で底部は回転糸切り痕を残す。台付も見られる。口唇部は水平に近く開く。22号では安定した平底の須恵器坏で体部、底部とも器肉は薄い。本遺跡唯一の羽口が出土も「ノロ」が付着。また陶器の小型壺の小片が出土、肩部に灰釉が見られた。

以上の諸点から本調査区内、言い換えれば馬背状独立丘の範囲では約四世紀に渡り、當時2軒前後の住居、集落が営まれていたと考えられる。古事記、日本書紀、風土記が編纂された当時の国衙や郡衙から離れた地域、末端の単位「集落」生活の一部を垣間見る遺跡と考えられるが、周辺には、現在まで近似するような遺跡は見られない。

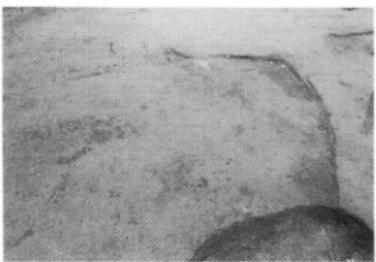
本遺跡の立地はやや隔絶された感じの馬背状台地であるが、出土遺物から特別な性格を持つ人々集落とは考えにくい。出土している土鍤が物語るように山や川、海、そして農耕に生きる糧を求めて生活した末端の人々の日常生活を鉄器の少なさや羽口の出土などから、つつましい自給自足の生活が想像され、豊富な住居跡から土間状へと変る過程と思われる。(了)



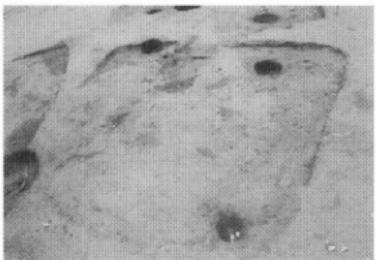
P L 1 調査区全景 右上西側調査区



1号住居跡発掘



3号住居跡発掘



1号住居跡発掘



1·2·3号住居跡発掘



2号住居跡発掘



4号住居跡出土遺物



2号住居跡発掘



5号住居跡出土遺物

P L 2 1号住居跡発掘 · 1号住居跡発掘 · 2号住居跡発掘 · 2号住居跡発掘 · 3号住居跡発掘 ·
1·2·3号住居跡発掘 · 4号住居跡出土遺物 · 5号住居跡出土遺物



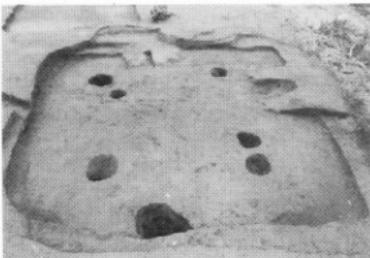
5号住居跡竈



7号住居跡竈



5・6・7号住居跡完掘



7号住居跡完掘



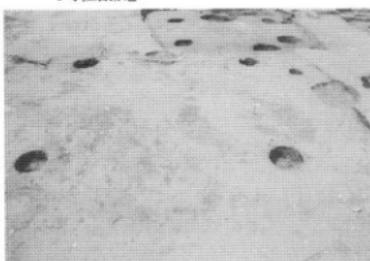
6号住居跡竈



8号住居跡竈



6号住居跡完掘



8号住居跡完掘

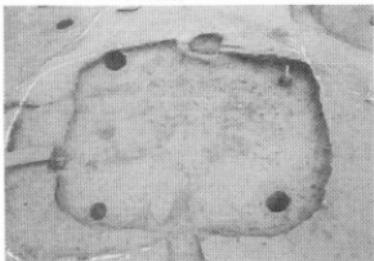
P L 3 5号住居跡竈・5・6・7号住居跡完掘・6号住居跡竈・6号住居跡完掘・7号住居跡竈・
7号住居跡完掘・8号住居跡竈・8号住居跡完掘



9号住居跡出土遺物



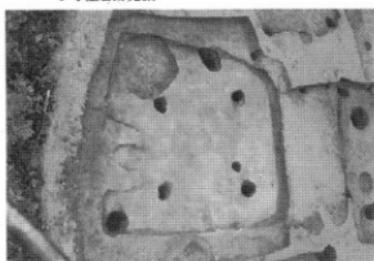
12号住居跡完掘



9号住居跡完掘



13号住居跡



10号住居跡完掘



13号住居跡完掘

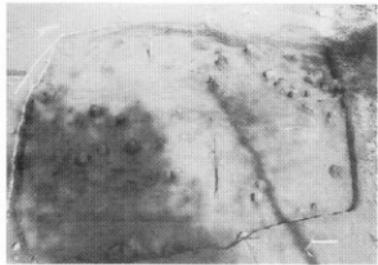


11号住居跡完掘

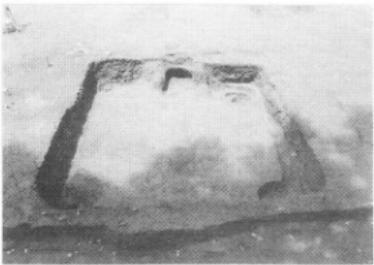


6·14·7·9号住居跡完掘

P L 4 9号住居跡出土遺物 · 9号住居跡完掘 · 10号住居跡完掘 · 11号住居跡完掘 · 12号住居跡完掘 · 13号住居跡 · 6 · 14 · 7 · 9号住居跡完掘



13·15号住居跡出土遺物



16号住居跡完掘



14号住居跡



17号住居跡出土遺物



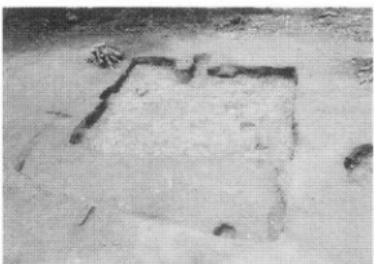
15号住居跡完掘



17号住居跡完掘



16号住居跡出土遺物



18号住居跡完掘

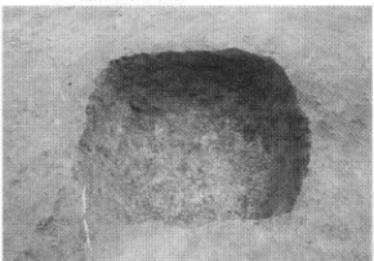
P L 5 13·15号住居跡出土遺物·14号住居跡·15号住居跡完掘·16号住居跡出土遺物·
16号住居跡完掘·17号住居跡出土遺物·17号住居跡完掘·18号住居跡完掘



19号住居跡出土遺物



23·24·19号住居跡完掘



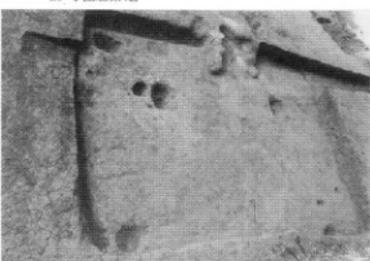
20号住居跡貯蔵穴



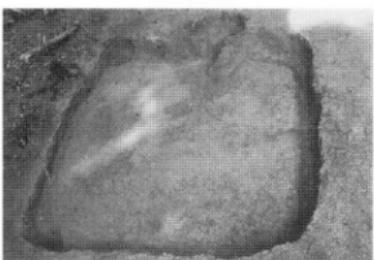
23号住居跡



18·19·20·21号住居跡完掘



23号住居跡完掘

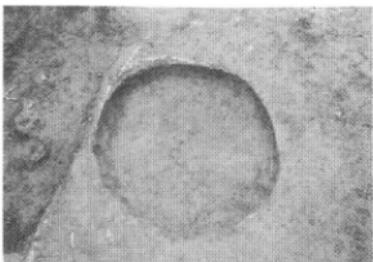


22号住居跡

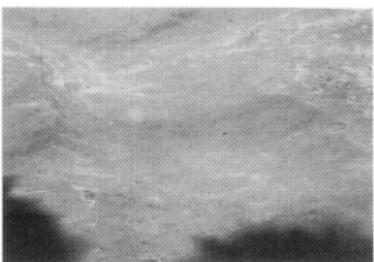


24·19号住居跡完掘

P L 6 19号住居跡出土遺物·20号住居跡貯蔵穴·18·19·20·21号住居跡·22号住居跡完掘·
23·24·19号住居跡完掘·23号住居跡·23号住居跡完掘·24·19号住居跡完掘



1号土坑完掘



2号溝完掘



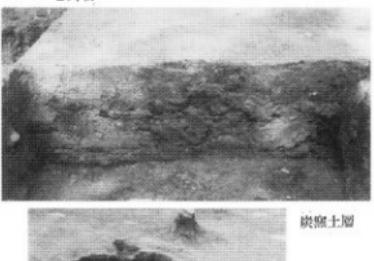
7号土坑出土遺物



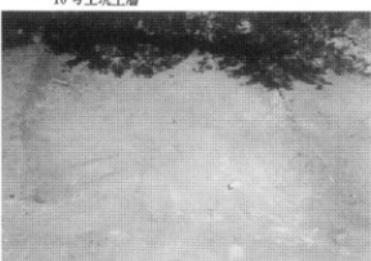
ピット群



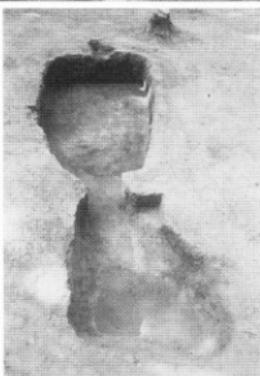
10号土坑土層



炭窯土層

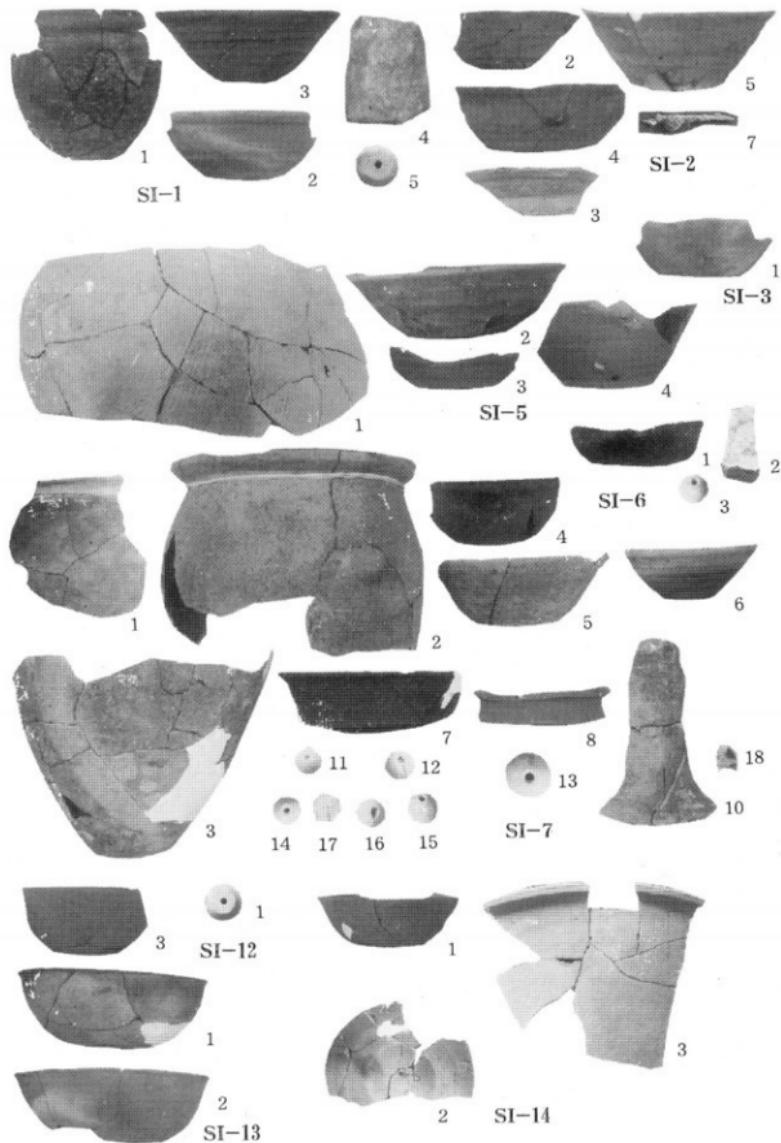


10号土坑完掘

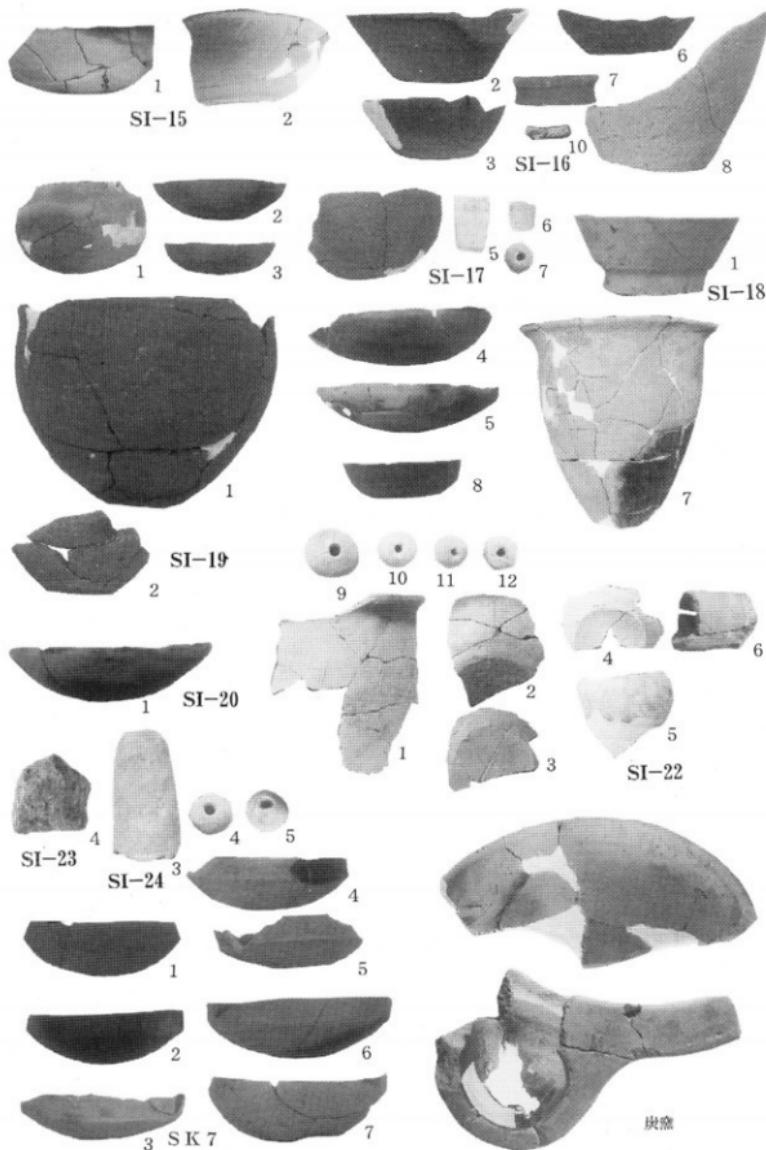


同完掘

P L 7 1号土坑完掘・7号土坑出土遺物・10号土坑土層・10号土坑完掘・
2号溝完掘・ピット群・炭窯土層 同完掘



PL8 SI 1 · SI 2 · SI 3 · SI 5 · SI 6 · SI 7 · SI 12 · SI 13 · SI 14出土遺物



PL9 SI 15 · SI 16 · SI 17 · SI 18 · SI 19 · SI 20 · SI 22 · SI 23 ·
 SI 24 · SK 7 · 炭窯出土遺物

行方市文化財調査報告 第6集

茨城県行方市
岩ノ入遺跡
発掘調査報告書

2008年10月

編集 鹿行文化研究所

汀 安衛

鹿嶋市青塚718-1

発行 行方市教育委員会

行方市遺跡調査会

印刷 (株)さんゆう社印刷

行方市玉造甲2641-6